
ネギま！太陽の戦士

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！太陽の戦士

【Zコード】

Z0215Y

【作者名】

葉月

【あらすじ】

- 神奈川県川崎市で繰り広げられる壮絶な善と悪の戦い -

天体戦士サンレッドと、悪の組織フロシヤイム川崎支部、ヴァンプ将軍。

幾たびの激闘により築かれた、友好的な敵対関係（ヴァンプ談）

そんな一人が、バイクでツーリング中に謎の発光現象が！

二人が目を覚ますとそこは神奈川県川崎市ではなく埼玉県麻帆良市

！？

常に全力を出すことが出来なかつたヒーローは、己が力を存分に振るい、白き翼を照らす太陽となる！

天体戦士サンレッドと魔法先生ネギまーのクロスオーバーです。
苦手な方はお気をつけください。
処女作ですので拙く、誤字脱字も多いと思いますが、よろしければ
見てやってくださいませ。

プロローグ（前書き）

初めまして！

皆さんの小説読んでて触発されて、勢いのまま書いた駄文。
処女作品ですので至らないことが多い多々あると思います。
それでも駄文なりにがんばっていきたいとおもいます！
よろしくお願いします！

プロローグ

神奈川県川崎市のあるマンション

ピーンポーン・・・

「おーい、かよ子ー？誰か来たぞー？」

リビングで寝転がってテレビを見ている男性は動じつとはしない。

「はーいー！」

奥から呼ばれた女性・・・かよ子が応対の為、玄関に向かう。

戻つて来たかよ子と来客の話し声。

「いつも助かります～。ヴァンプさん。」

「いいのいいの、気にしないでー！たくさん作ったほうが美味しいからね、お料理は。」

来客は、おそらく分けを持って現れたヴァンプ将軍。

言動はただの主夫だが、これでも世界征服を企む悪の組織フロシャイムの幹部である。

「まあーたお前かよ、ヴァンプ。ホント、気軽に来るよなお前は・・・。」

「ちよつとアンタツ！折角おそらく分けを持って来てくれたヴァンプさんにまたそんなこと言つてー！」

「まあまあ、かよ子さん。レッドさんも本気じやありませんよ。ね？レッドさん。」

「勝手に言つてろー！」

この悪態ついてる男性こそ・・・、天体戦士サンレッド。

神奈川県川崎市で日夜、世界征服を企む悪の組織フロシャイムと戦い続けるヒーローなのだ！！

たとえ働きもせず、彼女のかよ子に養われているヒ であつても！
そう！ モであつても！ ヒーローなのだ！！

たとえ悪の組織の幹部がおそらく分けに来るほど近所付き合いがあるうとも！ ヒーローなのだ！！

かよ子とヴァンプが世間話で盛り上がってからじばりすると、再び来客を告げるチャイムが鳴った。

ピーンポーン・・・

「あ、今度こそ来たかも！」

嬉しそうに玄関に向かうかよ子。

「何が来たんだよ？」

「？」

一方、訳が判らないレッドとヴァンプ。

しばらくしてかよ子が戻ってきた。しかも満面の笑みで。ますます訳の判らない二人。

「うふふ、二人とも着いてらっしゃい 」

「「？」 」

かよ子に促され、外に出てきた二人の目の前にあつたのは一台の赤を基調としたレーサータイプのバイクだった。

「お前ひーーれひーーべーしたんだよーー。」

動搖するレッド。

それもその筈。

ヒのバイクは以前、金に困ったレッドが中古屋に売つに出ていたヒーロー用バイクだった。

「アイシ! (フロシシャイム) 相手に必要なーかい。」とせレッドの言葉。

「ふふっ、中古屋さんに出でたから買ったのよ。アンタにプレゼントしたげよつと思つて。」

「凄いじゃないですかー! レッドさん!」

ヴァンプとしては、ヒーローらしく対決に登場したりしてくれるのでは?

と、期待が高まるばかりである。正直、かなり望みは薄いのだが・・・。

「アンタ、ヒーローなんだから、乗り物のひとつでも持つてないと格好つかないでしょ?」

「そーですよー。わわーー早速乗つてみせてくださいよー。」

「・・・なんでテメエに見せなきやなんないんだよ・・・。」

「別にいいじゃないの。アンタ、前にヴァンプさんの新品の自転車失くしてたんじゃない。お詫びに後ろに乗せてあげてもここんりこよ?」

かよ子の言ひとおつレッドは以前、ヴァンプの電動式自転車を紛失したことがあるので(翌日に取り戻したが)それを言われると負い目も相まつて、強く出れない。

「・・・ひー、わかったよー! 後ろに乗つけてやりやーーんだろー! 乗

つけりやー。」

本当はかよ子を乗せてやりたかったレッド。
しかし当の本人から言われてしまつたのだから、もつヤケクソである。

「おら、来いよ、ヴァンプー！」

レッドとしては慣りし運転も兼ねて借りも返して、せつれと終わらせてしまいたい。

と、気持ちを切り替え、久しぶりのバイクに跨つた。

「えへ、悪いですよー。」

口では遠慮してゐるもの、興味深々のヴァンプ。

「いいから早く来いってんだつ！」

「ひいっ！－すぐ乗りますー！」

慌てて後ろに乗り込むヴァンプ。

「気をつけでこいつらっしゃい。あんまり危ない運転しちゃダメよ

？」

「おー、わかつてゐて。じゃ、こいつくるわ。」

「こいつきます、かよ子さん。」

レッドがバイクを起動させる。

持ち主の所に帰つて來た、ヒーロー用のモンスター・マシンが喜びを表すかの如く唸りをあげる。

「オオオオオオオンッ！－オオオンッ！－

颯爽と去つていくレッド達。

「プレゼントしてよかつたわ あんなに嬉しかったから ジ機嫌なかよ子であつた。

ギヤオオオオオオツツツツツツツツ

颯爽と風を切る一台のバイク。いつまでも無くレッド達である。既に法定速度なんて無視である。

「ち、ちよつと、レッドさん…?」

「へへ

鼻歌交じりで反応がない。ジ機嫌である。

「レ、レッドさん…? レッドさん…?」

「…ちつ、んだよ? ウィンプ。」

「慣らし運転じゃないんですか…?」

初めてのバイク、初めてのスピード、ワントラップはもう楽しむ余裕なんかなく、恐怖でいっぱいである。

「スピード出せなきゃ楽しくねえじゃねーかよ~。」

そつ間にながら更にスピードをあげるレッド。

「ひいひい…? …ん?」

スピード計を見ようと覗き込むと、ハンドル中央にチカチカと点滅するボタンを見つけたヴァンプ。

「レッドさん、そのスイッチは? 点滅しますけど…?」

「あん? これか? これは…? なんだっけ? ま、押してみりやわ
かるか。」

ポチッ

バイク、そして搭乗しているレッドとヴァンプが赤い光とスパークに包まれ始める。

「あれ・・・？」

え？ ち、ちがうとー？ ランダム・ランダム

そして、一際激しい閃光！

ピカツ！！！

赤い閃光が収まると・・・

二人の姿は何処にもなかつた。・・・。

これが運命の始まり。

交わることのなかつた二つの世界。

全力を振るえない正義のヒーローと、英雄の遺児。

白き翼が太陽の加護を得た時、運命の歯車が回り始める。

プロローグ（後書き）

投稿が予想よりも遙かに恥ずかしい！！

11/1修正

Footnote · 01 (前書き)

続けて投稿。
作成スピードがあがらない！ o r z

「う・・・、うへん・・・。」

倒れていた男性が目を覚ました様だ。

その男性は起き上がるとすぐさま、自身の身体に怪我がないか確認を始める。

背はかなり高く、Tシャツの上からでもはっきりと分かるほど、かなり鍛え上げられている肉体。しかし、彼を見て一番目を引くのは身体ではない。

では何処を見るのか・・・?

それは顔・・・正確には頭部である。

何故なら、特撮番組の正義のヒーローの様な完全に頭部を覆った赤いマスクであった。

彼の名は『天体戦士サンレッド』

正真正銘、正義のヒーローだった。

「ん・・・?」

レッドはすぐ近くにもう一人が倒れているのに気がついた。

「おこ・・・、おこ、ヴァンプ・・・。」

軽く身体を揺さぶる。

ゆさゆせ・・・。

「う、うへん・・・、むこむこむこ・・・。」

なかなか起きない。

「起きろつー埋めるモー」「アリマシー!?

「ひいつー?スマセンー!レッジモー!」

怒鳴り声に、ほぼ反射のみで起き上がる男性。

古代ローマ兵の様な兜、立派な髭、紫のローブと云々立つ格好のヴァンプ。

こう見えて、世界征服を企む悪の組織『フロシシャイム』の幹部である。

普段は人のいい、カリスマ主夫で、天敵レッジとも(ヴァンプ曰く)良好的な敵対関係(笑)を築いている。

「さつあと起きねえからだらうが。」

「そ、そんなに怒らないでくださいよ、レッジモー!」

「ちつ・・・・・、んで?怪我とかはねーのかよ・・・。」

「え・・・・と、特にあつませんね。」

「そーかよ・・・。」

「あの、それでレッジさん・・・?」

「あん・・・・?」

「こー、ビーでじょうか・・・?」

「さーな?こつちが聞きいえよ・・・。」

見渡す限りの木、木、木。

しかも時間は夜。闇夜に二日月が浮かんでいる。

「ちよつと待つてる。」

「え・・・?」

そう言つと、レッジは神経を集中させ、能力を発動させる。

『レッジイヤー』

・レッドマスクの機能の一つ。最大半径10kmの物音を聞き分ける能力・

「・・・ん？・・・これは・・・？」

「何が聞こえたんですか？」

「片方は女・・・？いや、子供か？もつ片方は・・・獸か？それもかなりデカいな。」

「ええ！？大変じゃないですか！？何落ち着いてるんですか！？！その子を助けてあげないと！！」

「ん、でもこの音は・・・。」

「早く！正義の味方なんですからっ！…レッドさん！…！」

「あーもーー行きやいいんだろ、行きや・・・。」

レッド達の位置から少し離れた場所

レッドが察知した音源を作り出している一つの存在

・・・ギインッ！…・・・キキン！…・・・ガツ！…

小さな影と大きな影

小さな影は、月光を思わせるほど煌びやかな金髪、透き通る様な白い肌。

可愛らしく整つた顔立ちも相まってアンティーケな西洋人形を思わせる10歳頃の少女。

しかし、その端整な顔は現在、苛立ちによつて歪んでいる。

「ええいっー忌々しいっー！」

彼女は焦っていた・・・。戦闘におけるパートナーと寸断され、孤軍奮闘していたが、魔法を発動させる触媒・・・魔法薬も体力も既に底を尽いている。

「こんな雑魚に手こずるとは・・・！」

そう言って、肩で息をしながら相対する大きな影を睨む。

「その雑魚に苦戦しとる癖に、『テカイ態度の嬢ちゃんやなあ』。」

大きい影に月光が照らされる。浮かび上るのは異形。成人男性を遥かに超える身長、筋骨隆々な巨躯、丸太の様に太い手足。しかし、何よりも異形足らしめているのは、頭部より生えている角と、大きな牙。

- 鬼 -

太古より闇の住人として存在している者達。

只の人間が抗うことも出来ない屈強な存在である。

そんな存在が目の前の少女に語りかける。

「堪忍やで？ ワイかて嬢ちゃんみたいを手にかけるんはイヤなんや。けどな、嬢ちゃんは暴れすぎや。仲間大勢やられてもうて、見逃すつちゅーんは出来んのや。命令もあるしな。・・・ホンマ堪忍な？」

そういう、少女の身の丈以上はある棍棒を振りかぶる。

少女は体力の限界でもう動けない。

ならば死を静かに受け入れようと目を閉じた。

ビュオツツ！！

棍棒の風を切る音が迫る。

ズンツ！！

重たい衝撃音。

・・・・・

・・・・・

・・・・?

音はすれども、一向に痛みが来ない。
目を開くとそこには・・・

月光を反射し、闇夜を照らす赤いフルフェイスの男が

横合いから『片手』で棍棒を受け止めている。

「ふう・・・、間一髪つてとこか？」

「「なつ！？」」

新たな乱入者に鬼も少女も驚きの声をあげる。

レッドとしては少女が鬼に襲われているから横槍を入れただけであつて、状況とかちんぷんかんぷんである。

とりあえず、デカい方をぶん殴った。

ズンツツツ！！！

レッドの拳が鬼の腹に突き刺さった。

「が・・・あつ・・・!？」

鬼が崩れ落ちる。

そしてその巨体が粒子となつて消えていく。

ボシュウウウウウ

「何だあ？ 消えちまつたぞ、オイ？」

「召喚された鬼は致命傷を『』えると、その身は還されるのだ。そんな事も知らんのか？」

レッドが不思議そうにしていると、少女が答えた。

「まあいい、それよりも、見ない顔だが、ジジイの差し金か？」

「あん？ ジジイ？ 誰のことだ？」

「ん？ 違うのか？」

「ああ、俺達はなんつーか、あー・・・、迷子つてやつだ・・・」

「・・・本気で言つているのか？ 待て、俺『』達？ 仲間がいるのか？」

？

「・・・仲間つづーか、連れつづーか、まああと一人だな。おい、ヴァンプ！ 出てきて』ーぞ！ー」

近くから出てきたヴァンプ。レッドからバイクを預かつて待機していたのだ。

「はあーい！ もう忘れられてるかと思いましたよー！」

「お前はともかく、バイクを忘れるかよ。」

「ヒ、ヒドイ・・・。」

「で、迷子と言つたが二人とも『』がどこか知らんのだな？」

「ああ、さつぱりだ。

「タシ達一人は**氣か**一した△あ△せに倒れてたんです△

ふむ……（嘘をついてる様には見えんな……）

卷之三

「わかつた、ここに責任者の所まで案内してやる。どの道ここでは部外者は動きづらいからな、先に会つておいた方が何かと都合がいいからな。」

少女の提案に一人は明るくなる。

「でもお嬢ちゃんがこんな時間に一人で歩くのはどうかと思ひん
です、ワタシ。」

・・・
ピッ!
キッ!

「……ん? どうした?」

心配そうに少女に声をかけるヴァンプ。

ふるふるふる・・・

「だ、誰が少女か——つつ！？」

「ムナニガニ黙る距るが力引體」

「私は！エヴァンジエリン・A・K・マクダウェル！600年を

生きる真祖の吸血鬼！闇の福音！なんだぞ！――

いきなり怒り始めた少女・・・エヴァンジエリンに少し驚いたレッドとヴァンプ。

「お、おお。ほら、謝つとけよヴァンプ！」

「年上だったんですね・・・無礼な態度で申し訳ありません。」

深々と頭を下げるヴァンプ。

「フ、フン！ わかればいいんだ！ わかれば！」

すんなり謝罪されるとは思つてなかつたエヴァンジエリンの方が面食らつ。

「あ～、それじゃあエヴァンジエリン？ そろそろ案内してくれねえか？」

「あ、ああ、そうだつたな。すこし待て。」 うちの連れとも合流したい。」

そういうて念話で『』の従者に語りかける。

『茶々丸、聞こえるか茶々丸？』

数分もしないうちにエヴァンジエリンの連れがやつて來た。

・・・空から。

・・・・・・・・・・・・

緑色の髪をした女の子が、足からジェット噴射しながら降りてきた。

Figure · 01 (後書き)

これより先は、マイペースに投稿していく予定です。

11/1修正

こんな駄文をお気に入り登録していただけたのは!
感謝感激です!

がんばつて週一以上のペースでがんばりたいと思います!

それでは、どうぞ!

眩い光に包まれた二人の行き着いた先は、生い茂る森。

現れたのは大きな異形 - 鬼 -

鬼に襲われている少女を助けたレッド。

この少女との出会いが物語を動かし始める。

- F i g u r e · 0 2 -

「「」無事ですか！？マスター！」

空からやつてきた緑色の髪をした少女が己が主の元に駆け寄る。

「つむ、問題ない。お前」「そ大丈夫だったか？」

「はい、損傷率2%以下。問題ありません。」

「そつか、・・・ん？どうした？呆けた顔をしあつて。」

エヴァンジエリンが呆然としてるレッドとガーランドに声をかける。

「紹介しよう、我が従者の茶々丸だ。」

「初めまして、絡繹 茶々丸と申します。以後お見知りおきを。」

丁寧にお辞儀をする茶々丸。

「「」れは「れは」」丁寧に。ワタシはヴァンプといいます。」

「・・・レッドだ。」

「さて、レッドにヴァンプよ。やるやうジジイの元へ行こうではないか。先ほどの礼だ、案内してやるつ。光榮に思つがいい。」

「へーへー……まあ、頼むわ。右も左もわからねーからな。」

四人（三人と一体?）と一台は夜の森を歩く。
今までの経緯をヴァンプが茶々丸に説明し終えた所で雑談し始めた。

「へー、じゃあ茶々丸さんはロボットなの?」

「はい、ヴァンプ様。」

「うふふ、様なんて付けなくていいよ。」

「了解しました。ではヴァンプさんと。先ほどの問い合わせですが、私はロボット……女性型ですのでガイノイドです。」

「へえ、すごいですねえ、レッドさん。」

「ふつ、そうだな、お前の所のプラモデルロボとは比べられねえな?」

「もう！またそつやつて意地悪なことを言つんだから～！」

23

そういうしてゐ内に森を抜ける。

眼前に広がるヨーロッパ調の街並みに、二人は呆然となる。

「……日本じゃねーのか?」

「ジジジどうしましようレシドさん！ワタシ一パスポートとか持つてませんよー逮捕とかされちゃうんでしようか！？」

「……俺だつて持つてねえよ…」

「困ります、ワタシ～！」

そんな二人を怪訝な表情で見るエヴァンジェリン。

「オイ、本気で言つてはいるのか?ここ、麻帆良は日本だろうが。それも国内最大級の学園都市として有名だろうが。麻帆良という名前位聞いたことがあるだろ?」

「…………は？ 麻帆良…………？」

二人は間の抜けた声をあげる。

「…………フム、茶々丸。」

「ハイ、ここ麻帆良学園は明治中期に創設され、初等部、中等部、高等部、大学部や研究施設などの学術機関の総称です。一帯には各学校が複数ずつ存在し、敷地面積はとても広大です。また、学生寮や神社や商店街などの都市機能も併せ持つており、学術機関と併せて麻帆良学園都市と呼ばれています。各分野にて様々な功績を挙げている機関も多いので麻帆良という名前を一度は耳にしたことがあると思うのですが……。」

「…………聞いたことあるか？ ヴアンプ。」

「いいえ、それにウチの埼玉支部の知り合いからも聞いたことがあります……。」

「…………。」

沈黙する二人。

先頭を歩いていたエヴァンジエリンが振り返つて沈黙を破る。

「まあいい、その辺の議論は後だ。着いたぞ。」

エヴァンジエリンの背後には巨大な建物。どうやら校舎の様だ。バイクを脇に停め、中に入る一行。

「…………だ。」

一際大きな扉の前で止まる一行。学園長室と書かれている。その大きな扉を遠慮なく蹴破るエヴァンジエリン。

ドバ――――ン――――！

「ひょつ！？」

中から響く老人の声。

「オイ！ジジイ！身元不明者」一名、連れてきてやつたぞ……」

「身元不明つて……。」

「・・・まあ、怪しいわな……。」

呻きながらも入室するヴァンプとレッド。そして茶々丸。

「もう少し静かに入つてくれんかのう……。」

「なぜ私がジジイを気遣わねばならんのだ！」

エヴァンジエリンと話しているのは、異様に後頭部が長い老人であった。

老人は入室してきた三人に気がつくと、自分の椅子に深く腰かけ直した。

「では、客の方に改めて自己紹介しようかの。ワシが、この麻帆良学園及び関東魔法協会理事会の長をやつておる、近衛 近右衛門と申す。」

「まあ！これはこれは、ワタシはヴァンプと申します～。」

「・・・レッドだ。」

「もう！レッドさんつーまたそんなふつきらぼつーだからよく誤解されるつてかよ子さん心配してましたよー。」

「つるせえよ！お前にや関係ねえだろーが！

ギヤーギヤー言い争い始めた二人。

「あー・・・、そろそろいいかの？」

学園長が割つて入る。

「・・・つと、悪いなじいさん。」

バツの悪そうなレッド。

「ほつほつ、構わんよ。では单刀直入に訊け。主らは何用でこの
麻帆良に参った？」

先ほじまでの飄々とした雰囲気は既に無い。
老いてなお、関東及び学園最強の魔法使いが放つ殺気が部屋を覆つ
ていた。

返答次第では……、そういう告げるかの如くの重圧。
しかし、その重圧を真正面から受けているながら平然な調子で言つに
くやうにレッドが告げる。

「わからんねえんだよ、マジで……。」

「……は？」

部屋を覆う重圧が霧散する。

「ほ、本当かね……？」

場がなんとも言えない空気になつてしまい、困った様子の学園長。

そこには、今までだんまりを決め込んでいたエヴァンジエリンが割つ
て入る。

「嘘はついてないだろ？。ここ等はそもそも麻帆良自体を知らな
い様だ。」

「ふむ、一人が麻帆良に来た時のことと詳しく述べてくれんかの？」
学園長は判断材料を少しでも増やす為にレッドに更なる説明を求める。

「ああ……。」

そう言つてレッドは事の経緯を話し始める。

神奈川県川崎にて、久方ぶりにバイクに乗つたこと。仕方なく一人乗りしたこと。

かなりのスピードを出していた際に点滅していた用途不明なボタンを押したこと。

ボタンを押した途端、眩い光に包まれて気がついたら、川崎の森に一人で倒れてたこと。

「んで、途方に暮れてたどこので何か物騒な音が聞こえてきてよ。その場所に向かつたんだ。

そしたらそのエヴァンジエリンがよ、でけえ鬼？みてえなのに襲われてたからよお、助けたんだ。」

「ふむふむ、なるほどのう・・・。」

話を吟味する学園長。

「ジジイ。」

「ほ？」

熟考している学園長に話しかけるエヴァンジエリン。

「ジジイ、こいつ等に危険はないぞ。」

「何故じや？」

「こいつ等はここが麻帆良であるといつ事も、麻帆良がどういう土地なのかも、どんな物があるかもわかつちゃいない。そんな間抜けな侵入者など聞いたこともないだろ？？」

「ふむ・・・。」

しかし学園長とて、組織の長。はいそーですか、とはいかないものである。

「ここからは、私の推論だ。確証もないがいいか？」

「ふむ、聞こうかの。」

「「」いつ等について、不可解な点が三つある。」

そう言いながらエヴァンジエリンは人差し指を突き立てる。

「一つ、ここに来るまでに聞いた、こいつ等の周りの環境・常識。600年を生きた私でさえ聞いたことがないことばかりだった。」

エヴァンジエリンは続ける。

二人がいる世界は、まるでTVの様な平和を守るヒーローと怪人の構図、世界に存在する数々のヒーローと悪の組織、ヒーローと怪人が当たり前に生活する世界。

「一つ、こいつ・・・レッドは相当強い。それこそこの私ですら底が見えんほどに。表だらうが裏世界だらうが、ここ今まで腕の立つ男が、このナリで全くの無名というのがありえん。」

茶々丸が主の言葉を補足するべく言葉を続ける。

「話の中で出てきた組織名、人物、お一人様ご本人の情報を検索した結果、通常のネット及びまほネットでの検索結果は〇件でした。」

「三つ、おそらく事の発端であろうこいつ等の持つてきたバイク。魔力でも気でもない氣でもない、未知の『力』の残滓を感じた。あのバイクにある何かしらの装置が作動したのは間違いないだろう。『軽くスキヤンしてみましたが、バイク自体はほとんど異常がみられませんでした。ただし一箇所、大破している装置を発見しました。全体的に魔法技術が使われていないだろうと思われます。破損状態からみて、装置の起動は不可能かと思われます。』

「以上から私は、こいつ等が所謂異世界又は平行世界から来たと推測する。」

「ふむ・・・異世界のう・・・」

学園長は推論を聞き終え、椅子に深く座り直して考える。

そして、再び口を開く。

「ワシからいくつか質問をしたい。いいかの？」
「うなずく一人。

「まあ、本当にここにきた原因は判らんのじゃな？」

「・・・あ。」

「はい。」

落ち込み気味の一人。

「そのバイクの修理は出来るのかの？」

「具合見てねえからナンとも言えねえが、難しいんじゃねえか？」

「腕っぷしに自信はあるんじゃな？」

「まあな。」

「レッドさんは本当に凄く強いんですよ。」

「その力、弱きものに向けるか？」

今までで一番鋭い眼光の学園長。

「しねーよ。俺はヒーローだぜ？」

「そうですよ！レッドさんはそんなことしませんよー。」

ブンブンと怒るファンプ。

「最後に、衣食住とバイクの修理、当てはあるかの？」

「・・・どっちもねえなあ。」

「どうしましょー・・・。」

わずかな沈黙。

「・・・あい、わかつた！どうやら、バイクの修理が出来るまでここで働いてみんか？勿論、衣食住とバイクの修理が出来そうな者も紹介しよう。どうじゅ？」「そりや有難てえけどよ。」

「ええ、本当にー。」

学園長の提案に喜びを隠せない一人。

「今すぐ用意できる仕事は、警備員と指導員じゃ。これには相応の腕っぷしが必要じゃから、レッド殿向けじゃのう。ヴァンプ殿は何か得意な物はあるかの？」

「そ～ですね～、お料理かな？」

「コイツ、料理だけはスゲエんだよ。（しかし、悪の幹部が一番最初に思いつく特技が料理って……。）」

「ほつほつほ、ならば店でも開いてみますかな？ヴァンプ殿。」

「ええ！？ほ、ほんとに…？」

「お、レーリーじゃねーか。ヴァンプ、やってみるよ。」

驚くヴァンプに、はやし立てるレッド。

「い、いいんですか？実は少しあつてみたかったんです～。」

「ほつほつほ、では、明日までに必要な書類や手はずを整えておくでの。悪いんじゃが、昼前にもう一度ここに来てもらえるかの。ヴァンプ殿、悪いんじゃが明日の昼食をテストとさせてもらひでの。機材や食材はこれから用意するので、心の準備はしておくよつこの？」

「？」

「は、はい～～！」

やや緊張するヴァンプ。

「では最後に、今晚一人が泊まる所じゃが……」

「お～、ジジイ。」

黙っていたエヴァンジエリンが口を開く。

「今晚は我が家で預かってやる。」

「ほ？どういう風の吹き回しじゃ？」

「ファン～～、ジジイには関係ないことだ。話が終わつたなり、もう連れていくぞ？」

「うむ、今日はもういいじゃる。」

「ジャマしたなジジイ。行くぞ一人とも。」

ソファから身を起こし、部屋の出口に向かうトーヴァンジエリン。

「それでは失礼します、学園長。」

主の後を追う茶々丸。

「お邪魔しました～。また明日～。」

お辞儀して退出するヴァンプ。

「じゃーな。」

手をひらひらさせながら退出するレッド。

こつして四人は、この地の最高権力者の部屋を後にした。

突然の来客がいなくなり、静寂が訪れた室内。

「ふ～む・・・、異世界からの来訪者・・・のう。」

そう言い、机の引き出しから一枚の札を取り出す。

「悪いのう、エヴァや・・・。」

そして太陽はこの地、麻帆良を照らし始める。

誤字脱字等ありましたら、ご指摘下さるこませー。

2011/11/11修正

Finalt · 03 (前書き)

こんな小説に2,600アクセス& 2,600PVも！
感謝です！皆さんに言いたい！ありがとうございます！そして、ありがとうございます！
これからもがんばっていきますよ～！！

森で助けた少女、エヴァンジエリンと茶々丸。

二人の案内でこの地、麻帆良の最高責任者と出会いレッドとエヴァン

プ。

学園長の提案によつ、レッドは警備員兼指導員、ヴァンプは料理屋

をやることに。

今日の宿を提供するといつエヴァ。

一行はエヴァの家に向かうこととなつた。

- Figure · 03 -

学園長室を出た四人はそのまま学校も後にする。
レッドとヴァンプの足取りは軽い。

少なくとも当面の生活の不安が解消されそつだからだ。
そして今晚お世話になるエヴァンジエリン宅に向かう四人と一行。

「しかしそお、エヴァンジエリン。いいのか？世話になつて。そり
やまあ有難てえけどよお。」

「エヴァアだ・・・。」

呟くよつに言つたエヴァンジエリン。

「あん・・・?」

声が小さくて聞きなおすレッド。

「つーつーエヴァアでいいと言つたんだ！」

「お、おう・・・。」

怒鳴りちらすエヴァに、若干引き気味のレッド。

「光栄に思つんだな！フンッ！」

顔を赤くしてそっぽを向くエヴァ。

「照れ隠しがれている所、申し訳ありませんマスター。」

「うつ！誰が照れているだと！ええい！このボケロボ！巻いてやる

！」

「あああ、いけませんっ！？マスター！そんな乱暴に巻かれてはっ・
・・！」

どこからか取り出したゼンマイを茶々丸の頭に突き刺し、グリグリ回すエヴァ。

いきなりの展開についていけず、畠然とするレッドとヴァンプ。

しばらくして落ち着いたエヴァと茶々丸。

「で？ 一体何の話だ？ 茶々丸よ。」

「ハイ、レッドさんのバイクのことでの提案があるのですが。」

「ふむ？ 言つてみる。」

「はい、超に相談してみるのは如何かと思いまして。」

「・・・なるほど、いい案だな。明日にでも連絡を入れておけ。」

「了解です、マスター。」

トントン拍子に話を進めるエヴァ達。

「オイ、その超つてのは誰なんだ？ 流石に信用出来ねえヤツには触らせたくないねえぞ？」

そこに割つて入るレッド。

「ああ、まあ信用出来るんじゃないか？」

「はい、超は私の製造者です。他所よりも圧倒的に技術レベルの高い麻帆良においても更に高い技術力を持つており、『麻帆良の最強頭脳』と呼ばれています。」

「なんだか凄そうですねえ。その人なら直してくれるかもしだせんね！」

そういうしている間に、森の中の少し開けた所に出た四人。そこには一階建ての立派なログハウスがあつた。

「着いたぞ、これが我が家だ。」

そういうて家の中に入つていくエヴァ。

ログハウスを見上げているヴァンプと、邪魔にならないよう隅にバイクを停めるレッド。

玄関を見ると茶々丸が客人一人を待つてゐる。

「ようこそおいで下さいました。中へどうぞ。」

中に入るよう促される一人。

「夜分遅くに失礼します。」

「邪魔するぜ。」

レッドとヴァンプが中に入つて目に入つてきたのは、いたる所に置かれたアンティーク人形。

見渡す限りの人形、人形、人形。

大勢の人形を呆然と眺めている一人に茶々丸が声をかける。

「お茶の用意が整つまで、少々お待ちくださいませ。」

ペコリとお辞儀をし、準備の為に台所に引っ込む茶々丸。

「あ、お構いなく。」

気を遣うヴァンプ。周りを再度を見回してレッドに話かける。

「しかし・・・、凄い数のお人形さんですね、レッドさん。」

「おお、どれもこれも凄え凝つてんなあ・・・。ん?」

そう言いつつ、一体の人形に目を惹かれるレッド。

他のフリルドレスなどの豪華な見た目の人形と違い、黒のワンピースにカチューシャとシンプルな格好。

背中には可愛らしい小悪魔みたいな小さな羽根がついてゐる。顔はどことなく茶々丸を幼くした様な顔立ち。この人形だけ、他のとは存在感が違うと感じたレッドは人形を手に取つてみる。

「何ジロジロ見テンドア？斬リ刻マレテーノカ？」

人形が喋った。

しかもとんでもなく物騒なことを言い放った。
普通なら絶叫物だが……。

「あん？ やれんのか？」

しかしレッドは何でも無いように言い返す。

「ええ～・・・」

横で見ていたヴァンプも呆れてしまう。

「ケケケ、イイ反応スルジャネーカ。氣二入ッタゼ、赤イノ！」
「オメーもいい殺氣飛ばすじゃねーか、縁の。」

物騒な友情を結んでいる一人と一体に、偶然とするヴァンプの後ろから茶々丸が声をかける。

「お待たせしました。お茶が入りましたので、どうぞいらっしゃへ。」

リビングのテーブルに促されて、席につく二人。

「オイ、妹ヨ。オレモソッチニヤツテクレヨ。」

「はい、姉さん。」

「ワリーナ。」

そう言い、喋る人形をテーブルに備え付けてある小さな椅子に座らせる。どうやら定位置の様だ。

「その小さなお人形さんが、茶々丸さんのお姉さんなんですか？」

と不思議そうに尋ねるヴァンプ。

「ええ、マスターの初代従者のチャチャゼロ姉さんです。姉さん、こちらはレッドさんにヴァンプさん。故あって、今晚お泊めすることになりました。」

洗練された動作でお茶をカップに注ぎながら答える茶々丸。

「オウ、チャチャゼロダ！ヨロシクナ！」

卷之三

「おー。姉ちゃんは今、とある事情で自力による活動は出来ません。

「ふん。」

「忌々しい呪いのせいだな。」

背後からした声にレッドとヴァンプが振り返ると、階段から着替えを済ましたエヴァが降りてきた。

「チャチャゼロは私の魔力で動くんだが、今の私は魔力を封印されていてな。そのせいで自由に動けないのさ。」

思い出してイライラしたのか、やや乱暴に椅子に座るエヴァ。黙つて主にお茶を差し出す茶々丸。

そのお茶を優雅に口に運ぶエヴァ。その所作は非常に美しく、一枚の絵画の様だ。

「シカシ、アノ御主人が他人ヲ泊メルトハナ。氣ニ入ッタノカ？」
「ぶう〜〜〜つつつ！？」

・・・訂正。お茶と共に、漂つていた優雅さが木つ端微塵に吹き飛んだ。

「ゲホツ！ ゲホツ！ ？ ？ ？ 何を言う！ チヤチヤゼロ！ ？」

咽るエヴァに黙つてタオルを差し出す茶々丸。メイドの鑑である。

「ダッテヨ? 他人ヲ泊メルナンテ初メテノコトダシナ。」

「つー? か、借りを返しただけだ! 深い意味はない! !」

ギヤーギヤー騒ぐ主従を他所に、お茶談義するヴァンプと茶々丸。我関せず、と黙々とお茶を飲むレッド。

窓の外を見ていたレッドが立ち上がる。何か無いかとポケットに手を入れると、出てきたのはパチンコ玉。転移前に行つっていたパチンコ店のものである。

・・・ガラッ。

急に窓を開けたレッドに全員が注目する。

「・・・気に食わねえな。いつこいつのはよ・・・。」

手にしていたパチンコ玉を・・・

チュインッ!

親指で弾き飛ばす。
指弾である。

結果も確認せず、窓を閉めて席に戻るレッド。

「おい、レッド。先刻のは一体、何を撃つた?」
興味深々に聞いてくるエヴァ。

「あん? 何つて・・・、学校からここまでずつと後を着いて来てた何かだよ。道中迷わないようにとかで監視してんなら別に構わねえが、ずっと家の中まで監視してやがったからな。気に食わねえからよ、警告の意味も含めて威嚇しただけだ・・・。」

•
•
•
•
•
•
•○

エヴァは驚愕した。

自分も気がつかなかつた、監視の目をしともたやすく看破したこと、そして、察知からの迅速な対応に。

恐らくその監視はシシヽによるものだ。ならば自分が気付かない様な監視を用意することも出来ただろう。だが、レッドは気づいた。その事実にとても興味が湧いてきた。コイツはどれほど強いのだろう・・・と。

一方、レッドは急に黙り込んだエヴァを見て、不安を覚える。

「…マズか？たか？」

「……………そ……………ですよ！レッドさん！しおなに暴力はマヌケですよ……………」

「 おい？ エヴァ？」

小説喰く日本

おぐい

「茶々丸！別荘を用意しろ！－「イツの強さに興味が湧いた！」

そう言い、地下へ消える茶々丸。

「オホ！ 楽シソウジヤネーか、御主人。オレモマゼロヨ！」
「くくく、いいだろう。レッド！ ヴァンプ！ ついてこい！ 面白い物

を見せてやるつー。」

「「？」

急にテンション上げっぱなしのエヴァに置いてかれてる一人。

一行は家の地下室に降り立つた。

そこには大きなガラス球を設置している茶々丸の姿があった。

「準備出来ました、マスター。」

「うむ、じ苦労。」

大きなガラス球を覗き込むレッド達。その中にはお城と海が見える。
「なんだ？模型？ジオラマか？」
「凝つてて凄い綺麗ですね～！」

「おい、二人とも。ここの中に立て。」

言われるままにガラス球の正面の魔法陣の中に立つ二人。
そこにエヴァ、チャチャゼロを抱いた茶々丸が加わり、エヴァがガラス球のボタンを押す。

ポチッ

「ククク・・・、存分に驚くがいい！」

足元に魔法陣が輝き、眩い光が溢れる。

・・・カツー！

光が収まると・・・

レッドとヴァンパイアの眼前には、大きく立派な城と南国の海が広がつ

ていた。

感想・「」指摘・「」提案、お待ちしておりますー。

Final · 04 (前書き)

祝！50000PV1000アクセス突発！
皆さま、ありがとうございます！

このような歎文ではあります、より一層頑張っていきたいと思います！

今回、少しだけ戦闘描写があります。

それではどうぞ！

たどり着いたのは一軒の立派なログハウス。

そこでエヴァの初代従者チャチャゼロと出会う。

レッドの実力の一端を垣間見たエヴァは、好奇心を抱く。

そして別荘と呼ばれる大きなガラス球を引っ張り出してきた。そして光に包まれた一行。

- F i g u r e · 0 5 -

不思議なガラス球の前に立つていたはずなのに、田の前に広がるのは石造りの大きな広場。

今居る、小さな足場と繋がっている唯一の建造物。それ以外に見えるのは空のみ。

繋がっている通路には柵はあるが、手すりすら付いておらず相当怖い。

「どうだ?」この空間は、外での一時間が一日になる。私は別荘と呼んでいる。ここなら監視の目はないし、自由に振舞えるのさ。」

フフン、と自慢げなエヴァ。

「付いて来い。」

そう言い、エヴァはすんすんと進んでいく。その後をすたすた着いていくレッド。

「ひ、ひえええ……。ち、ちよつと待つてくださいよお～！」

顔を真っ青にして腰が引けているヴァンプは、生まれたての子鹿のようににびるびるとしか進めない。

しかし、先頭の二人は待つてくれない。

足元しか見れないヴァンプに影が差し掛かる。

「？」

その影に気づいたヴァンプは顔を上げた。

「ヴァンプさん、お手を。」

「ケケケ、情ケネーナ。」

そこにいたのは茶々丸とチャチャゼロ。

「ち、茶々丸さん……。」

ジーン・・・。

優しき少女に感動しながら手をとるヴァンプ。

「ありがとね～。」

茶々丸のHスコートで何とか渡りきったヴァンプ。所要時間およそ一時間。

そのまま、茶々丸の案内で広場地下にある部屋に案内される。部屋には既に先行していた一人が覗いでいた。床には既に数本の酒瓶が転がっている。

「遅かつたな、茶々丸。」

「ヴァンプがヘタレだからな、仕方ねーよ。」

見捨てていった上にあんまりな言われよつづな垂れるヴァンプ。

「オーラモ混ゼロヨー。」

そう言い、茶々丸の腕から降りて自分で酒瓶を開けるチャチャゼロ。そんなチャチャゼロを見て、レッズは疑問を口にする。

「・・・ん？自分で動けんのかよ？」

「ヨリは通常空間より魔力が満ちているからな。私も多少の力の行使が出来る。」

「フーン・・・、そんなもんか。」「ねえねえ、エヴァちゃん！」

一人の会話に割つてはいるヴァンプ。

「誰がエヴァちゃんだ！私は600歳だと言つてはいるだろう！！」

「まあまあ、エヴァちゃん。それよりワタシ、魔法が見てみたいの！魔法が！！」

「諦める、エヴァ。コイツには何言つたって聞きやしねえんだよ。」ちゃん付けに怒り心頭のエヴァに、キラキラした目で見つめるヴァンプ。

激しく同情するレッズ。

「チツ・・・んん？いいだろ？魔法だな？ククツ、存分に見せてやる！じゃないか。」

苛立つた顔から一転、妖しい笑みを浮かべる。そつ言うとエヴァはパチンと指を鳴らす。

「チャチャゼロー！茶々丸！準備しろーーー！」

「了解しました、マスター。」

「ケケケ、久シプリダゼ！」

早速準備に取り掛かる従者一人。

「お前らはこつちだ。」

エヴァに案内され、先ほどまでいた建物の前にある大広場へと出た。

「準備完了しました。」

「待タセタナ、ケケケケケ。」

しばらくすると準備を終えた従者一人がやつて来た。

茶々丸はメイド服から、動きやすそうな服に着替えている。

チャチャゼロは、自分の身の丈ほどもある大振りのナイフを両手に持っている。

「・・・い、一体何の準備を？」

「フフフ、ちょっとした余興さ。お前の望み通り、魔法を見せてやるさ・・・。」

ヴァンプの問いに、エヴァは楽しそうに闇夜の如く漆黒のマントを翻す。

「ただ魔法を見せるだけではつまらん。そこでレッドよ、どうだ？ ちょっとした力試しをしようじやあないか。」

「あん？ 力試しだ？」

「そうだ、貴様と私で模擬戦を行つんだよ。」

「あー・・・、そういう事かよ・・・。」

楽しそうに提案してくれるエヴァに、今ひとつ乗り気でないレッド。

「ええっ！？ 危ないですよ～！～！」

「何だ？ お前は魔法が見たい、私はレッドの実力が知りたい。どうだ？ 実にシンプルなギブ＆amp;テイクじゃないか。悪の魔法使いに無償で、何かしてもらえると思うなよ？」

模擬戦と聞いて慌てるヴァンプに、とてもういい笑顔のエヴァ。

「はあ、しゃ～ねえなあ・・・。」

そう言い、広場中央に向かうレッド。

その後を続くエヴァ、茶々丸、チャチャゼロ。

「あん？ エヴァだけじゃねーのか？」

「私は本来後衛型の魔法使いだからな。前衛に従者を配置するのが本来のスタイルなのさ。どうした？ 3対1は不満か？」

「別に問題ねーよ。」

「ゴキゴキと首を鳴らしながら壁にレッード。」

「ククッ、大した自信だな。だが、そうでなければ面白くない。」

楽しそうに笑顔を浮かべ、ゆつくつと浮遊していくエヴァ。

「よろしくお願ひします。」

「ケケケ、早ク殺ローゼー。モウ我慢出来ネーゼー。」

お辞儀する茶々丸と、待ちきれない様子のチャチャゼロ。

「ククツ、精々楽しませてくれよ?レッド。・・・ オイ!ヴァンプ!
!」

「・・・ハ!ハイツ!?

急に呼ばれて驚くヴァンプ。

「合図を出せ!始めるぞ!-!-!」

そう言われ、大きく息を吸い込むヴァンプ。

この後、発せられるであろう合図。それに合わせた初動を行う為に集中する三人。

「えつと・・・、始めてください!-!-!」

あんまりにも氣の抜けた合図だった為、空中でエヴァがこけた。
「あんのバカ・・・」

レッドも脱力した。

しかし、そんな空氣を意に介さず躍り出る一つの影。

ヒュボツツ!-

「レッドさん、失礼します。」

丁寧な挨拶と共に小手調べの突きを繰り出す茶々丸。
シャツツ！！

「ケケケ、スグニ終ワルンジャーネーゼ？」

大振りのナイフを首を刈り取らんばかりの鋭き一閃するチャチャゼ
口。

「・・・はあ。」

氣だるそうに一人の攻撃を避け、捌くレッド。
そのまま2対1の接近戦に突入する三者。
絶妙なコンビネーションの茶々丸とチャチャゼ口。

「・・・ええい！そのまま抑えておけよ！リク・ラク・ラ・ライラ
ック！」

氣を取り直したエヴァが従者一人に指示を飛ばしながら呪文詠唱の
為、始動キーを唱える。

その間も茶々丸のパンチが蹴りが、チャチャゼ口の大小二振りのナ
イフが、常に同時に振るわれ続ける。
しかし、レッドは氣だるそうなまま捌き続ける。
続いている内に茶々丸が違和感を覚える。

「何故、反撃されないのでですか？」

攻撃姿勢はそのままに茶々丸はレッドに問いつ。

「んぐ・・・。」

ポリポリ・・・。

レッドは頬を搔きながらも茶々丸の攻撃は避け、チャチャゼロのナイフは捌く。

そこに一人にエヴァから念話に入る。

(もういい、二人とも下がって待機だ。)

「・・・つー姉さん！」

「チツ！モツト楽シミテーノニヨー！」

従者一人が距離を取る。

後方のエヴァが呪文を紡ぎ・・・、

「氷の精霊17頭 集い来りて敵を切り裂け！」

キンキンキン！

17の氷の矢がエヴァの周りに形成される。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢！！」

・・・解き放つ！

魔法を撃つたエヴァは追撃はせずに様子を見る。

(・・・まあレッド、一体どう出る？)

17の氷の矢がレッドに迫る。

ドキュキュキュキュ！

「・・・オイオイ、初めての魔法だつづーのに・・・。」

初めて見る魔法に多少面食らいつつも冷静に観察する。

（氷を撃ち出すだけ・・・か？まずは・・・無難に回避か？）

余裕を持つて回避するレッド。

それを見ていたエヴァは魔法の射手に追尾を命ず。

通過した魔法の射手が通過した後、弧を描き戻つてくるのを見たレッドは迎撃を選択。

（・・・チツーやっぱ追尾できんのかよ！仕方ねえなあ！迎い撃つ！）

レッドは腰を落とし、迎撃体勢を取る。

一連の動きを見ていたエヴァはレッドを值踏みする。

（格闘戦は上々、状況判断能力も中々。さて・・・どう迎撃するつもりだ？ククツ、面白い物を見せてくれよ？レッド。）

レッドは脚を石畳に向けて、踏み抜く！

捲あがつた石畳の破片を拳で撃ちだし、魔法の射手にぶつけ、相殺していく。

ボツ！ボボボツ！

レッドの身に迫る魔法の射手は4発までになっていた。

残り4発の魔法の射手に向けて、掌をかざす！

すると、その掌がみるみる高熱を帯びてこくのをエヴァは見逃さなかつた。

その高熱を帯びた掌で魔法の射手を相殺していくレッド。

「ふむ、今日はこれ位にしてやるや。」

レッドが綺麗に魔法を相殺したのを見たエヴァが降下しながら叫ぶ。それに合わせて従者一人も戻ってきた。

「今撃つた魔法が、『魔法の射手』。最もオーソドックスな攻撃魔法さ。どうだつた? 一人とも。初級とはいえ、初めて見て、体験した魔法は?」

「うよほどビデオクリしちゃいましたけど、綺麗でした~!」

と、やや興奮気味のヴァンプ。

「ん?まああれくらいならビートこたねえな。ただ、初級つとう位なんだから、中級や上級つてのもあんだけ?」

そして、戦う者であるが為の更に上級魔法を警戒するレッド。

「まあ、その辺は追々だな。戻つて晚酌とでも洒落込もうではないか?」

そう言い、建物に向かうエヴァに皆は着いて行くのであった。

その晩酌で振舞われるのは、ヴァンプと茶々丸の特製ソマミの数々。エヴァはヴァンプの腕前に驚きつつも、満足そうに舌鼓を打つた。酒が進み、ヴァンプは早々にダウン。残ったエヴァ、チャチャゼロ、レッドはのんびりと酒を楽しむ。

「相変わらず弱えなあ、ヴァンプは・・・。」

「ふむ、といひでレッドよ？先ほどの模擬戦で気になつていたのだが・・・。」

「あん？何がだ？」

「なぜ開始直後の格闘戦で、防戦しかしなかつたのだ？あれだけの身のこなし、一人を倒すことは容易かつた筈だぞ？」

「ソーダゼ！アンナ簡単ニアシライヤガッテ！」

「・・・ハツ！決まつてんだろ？簡単な事じやねーか。」

「・・・？」

怪訝な表情のエヴァ。それに対し、さも当然とばかりのレッド。

「俺はヒーローだぜ？女子供を殴れる訳ねーだろーが？」

「・・・クツ！アハハハハ！この闇の福音を！その従者を！女子供とはな！アハハハハ！」

（「ソーダゼは本当に面白い！しばらくは退屈しないですみそらうだな！）

こづして酒宴は更に盛り上がり、夜も更けていった。

Final · 04 (後書き)

戦闘描写って、こんなに難しいんだって実感しました。そんな今話まだ作中では1日経つてないんですよね(^_^ ;

何とか、一週間に一度の更新は維持!
もちつと早く作れればいいのになー。

Finest .05 (前書き)

くつー生産スピードが上がらない！！！
ストックが全然貯まらない・・・。

それではどうぞ！

別荘にて行われた、エヴァ vs レッドの模擬戦。

エヴァはレッドの実力を見る為に、レッドは魔法を知る為に。卓越した格闘技能、状況判断能力を見せるレッド。アーティファクトは魔力を知る為に。エヴァが晩酌を始める。

「女子供を殴れるかよ。」

ヒーローとしての矜持を見せたレッド。アーティファクトを氣に入るエヴァ。

酔いつぶれるヴァンプ。

別荘での一夜が明ける。

- Figure · 05 -

別荘での一夜が明け、朝を迎える。

一番早く起きたのは、長年の習慣から、ヴァンプ。

「・・・うつへん、朝ごはんの支度しなきゃ・・・。あれ・・・?
アジトじや・・・なこ?」

モゾモゾとベッドから這い出るヴァンプ。

起きて目に入ってきたのは、慣れ親しんだ木造一戸建てのアジトの自室ではないことに気づく。
寝ぼけた頭もよしやく覚めてきた。

「あ、エヴァちゃん家にお世話になつてゐるんだつた。」

お世話になつてゐならせめて朝食位は自分が用意しようつと思つて立ち、
部屋を出る。

一番目に行動を開始したのは茶々丸。

「・・・スリープモード終了。各部オールグリーン。通常モードで
起動します。」

起動した茶々丸は朝食の準備を開始するため、待機場所から台所に
向かう。

道中、センサーを使って、自分の主、客人に異常がないかを簡潔に
確認する。

主と客人の一人はまだ部屋から出でていない…寝ていると判断。
もう一人は既に部屋を出でている様だ。

しかし、やたらとウロウロと歩き回つている様子。

「慣れない場所で、迷子になつたのかも知れませんね。」

そう判断して迎えに行こうと行動を開始する。

「ううう…」「なんだろ~?」

意気揚々と部屋を出たヴァンプは、見事に道に迷つた。既にやつて
の部屋にすら戻れない状態だ。

そもそも、すぐに酔いつぶれて寝てしまつたヴァンプは禄な案内もされておらず、迷子になるのも当然といえる。

「まだ朝も早いから、エヴァちゃん達を起こすのも気が引けちゃうし…、レッドさんはこんな時間に絶対起きてる訳ないし…。」

早朝に大声を出して誰かに来てもらつのも気が進まない悪の組織の幹部、それがヴァンプ将軍（カリスマ主夫）なのだ！

そんなヴァンプに救いの手が差し伸べられる。

「見つけましたよ、ヴァンプさん。」

「迷子トカ、笑エルゼ！ ケケケ！」

茶々丸からは救いと、チャチャチャゼロからは追い討ちを受ける。

「つづり、お台所にも部屋にも戻れないで困つてたのー。」

「キッチン…ですか？ どういったご用件で？」

プリプリと情けない事を言つカトーンプに茶々丸が問う。

「あ、あのね、お世話になつていいからや、せめて朝」はんでも用意しようと思つたの！」

「そうでしたか、ですが朝食を用意するのは私の仕事ですので。ヴァンプさんはお客様をままで、こちらがおもてなししなければいけません。」

断る茶々丸。しょんぼりするヴァンプ。

「ケケケ、イージャネーカ妹！一緒に作ツテヤレバ。」

「…わかりました、キツチンまで」案内します。ビブモハハハ。

そこに待つたをかけるチャチャゼロ。

それに同意し、キツチンへと歩きだした茶々丸。

「ありがとー！茶々丸ちゃん！」

こりして茶々丸とヴァンプは仲良く朝食の準備に取り掛かった。

「セツいえば、ヒガアちゃんは好き嫌いはあるの？」

トントントントン・・・、包丁が心地よいリズムを刻む。

「マスターはニンニクとネギ以外、好き嫌いはありません。」

グツグツグツ・・・、食欲をそそる香りが広がっていく。

「タダシ、カナリノグルメダカラナ。生半可ナ物ヲ出スト、ヘソ曲
ゲチマウゼ？ケケケ。」

茶々丸の頭の上で見学してゐるチャチャゼロが言つ。

「じゃあ、氣合いれないとね！」

ムンーと氣合を入れるヴァンプ。

「…・そろそろ完成ですね。」

「ジャア、寝ボスケナゴ主人ヲ起コシテ来テヤルカ。」

茶々丸の頭から飛び降り見事な着地を決めるチャチャゼロ。

「あ、じゃあワタシもついていこうかな。道とか覚えたいし。茶々丸ちゃん、あと頼める?」

「あとはお任せください、ヴァンプさん。」

「ヨシ、ジャア着イテ来ナ！オッサン。」

「テテテテテ・・・と可愛らしく足音で歩きながら先行するチャチャゼロ。」

「あ、待つてよー！」

「姉さんも楽しそうでよかつた・・・。ヴァンプさん達のお陰ですね。」

そんな一人を微笑みながら見送る茶々丸は、朝食の仕上げにかかる。

「ヤッパリ、レッドノ奴ハ強エンドナ？」

「そりやあもう！滅茶苦茶強いんだから！お陰でウチの組織、フロシャイムのちつとも世界征服が進まないもの！いつも配下の子達がボツコボコにされちやうの！」

「ブンブン！そんな音が聞こえてきそうな程、憤慨するヴァンプ。」

「オ？オッサン、部下ガインノカ？」

「沢山いるよー？皆良い子ばかりなんだからー。」

「怪人トカ、切ツテミテーナー！ケケケ！」

「クツクツクツクツクー！我がフロシャイムの精銳達、簡単にはやられはせんぞー？」

急に悪の幹部モードになるヴァンプ。（普段はただのカリスマ主夫）

そういうじでいる内に、レッドの寝ている密室に到着。

「レッドさん、起きてください！」

ドンドン！

・・・・・。

・・・。

「返事ガネーナ？ドースル？ヤツチマウカ？」

「ククク、それもよからう。やれるか？チャチャゼロよ。」

「ケケケ！任セトケ！」

未だ幹部モードのヴァンプに、悪ノリし、愛用の大振りナイフを取り出すチャチャゼロ。この二人、意外といいコンビかもしれない。

カチャ・・・・、キイイイイ・・・・。

出来るだけ静かに扉を開けるヴァンプ。

「失礼します・・・。」

悪ノリしても礼儀を忘れない。それがヴァンプクオリティ。

「ククク、暢気に寝ておるわ。そのまま永眠となることも知らずに

！（注：小声）

「ケケケ、斬リ刻ンデヤルゼー！（注：小声）」

「やれいっ！ チヤチャゼロよ！ 憎き宿敵サンレッドを抹殺するのだ！」

「ケケケ～ツ～！」

「『やれい～』じゃねーよっつーー（怒）」

ガバッ！ バサア～！ ヴッ～！

順番に、レッドが起きた音・シーツをチャチャゼロに被せた音・ヴァンプに拳骨喰らわせた音である。

「ムア～～」「ノ～～離セー！ チキシヨー～！」

シーツに包まれたまま、がつちり固定され身動き取れないチャチャゼロ。

そして、頭にタンコブを作り正座をせられてるヴァンプ。既に説教済みである。

「ううう～～～、すみませんでした～。」

「んで？ わざわざ、寝込み襲いに来たのか？ あん？」

「いえ、朝食の準備が出来たんで起こしにきたんですよ？ そしたらノックしてもお返事が無かつたもので～～～、つい～～～。」

「そんな軽はずみで人を襲うなよな～～～。」

朝食が出来てるなら待たせる訳にもいかないので、一行はエヴァを起こしに行くことに。

「ソコノ部屋ガ、ゴ主人ノ部屋ダゼ。」

「ノンノンノン～～～。」

「エヴァちゃん、朝」はんですよ。」

・・・、母親かよ・・・。

・・・ガチャリ。

部屋の主、エヴァが不機嫌そうな顔で出てくる。

「おはよう、エヴァちゃん。朝」はん出来て「」
「エヴァ、わんって言つたな……」

ヴァンプの声を遮り、吼えるエヴァ。朝から元気な吸血鬼である。

「エヴァ、諦めろ……。ハイツはずつと珍なんだ……。」

レッドの声に、納得しきれないエヴァ。

「屏風で隠されても、まだ見つかるやうだ！」

「もうもう！朝一はんか冷めちゃいますよ！」

そう言いヴァンプと共に先に行こうとするチャチャゼロ。口うな垂れて歩くヒヴァー、元気だるそうなレッド。

せつして食卓を飾るのは、純和食の朝ごはん。

ごはん・味噌汁・焼き海苔・玉子焼き・焼き鮭・キンペリガボウ・小松菜のおひたし。

「お? ヴァンプが作ったのか?」

「ええ、お世話になるんで朝食くらいはと思いまして。」

「おい、エヴァ。期待していいぜ? ロイシ、料理だけはスゲーんだよ。」

「ほう? 昨日のシマリも中々だった。ならば期待させてもうひとつどうか。」

「ホントはヌカ漬けも欲しいことこのなんだけれどね。それ、呑じ上がれ。」

「

朝食は大好評であった。

朝食を終えて、食後の一服をしてみるとエヴァが話し始めた。

「さて、晩まで出られんからな。どうせならもう少しこの世界のことを学んでおけ。情報や常識がなければ話にならんだけ。お前の身元は、あまりバレない方が良いだろ? からな。」

「・・・だな、メンディイけどな。」

「お勉強会ですね?」

「学ぶのは、魔法使い共の文化やら価値観やら、そんなことばかり。余計な衝突を避けるのに必要だら?。」

全員が別の部屋に移動。そこは机と椅子、ホワイトボードだけの簡単な教室のような部屋だった。

そこにエヴァがやってきた。教鞭と眼鏡を装備して・・・。

「ふふつ、エヴァちゃん、先生みたいだねー。」

「形から入るタイプか・・・？」

「えー、ではこれより授業を始めてやろつ。まずは一般的な魔法使い共についてだ。」

「まず、魔法は世間一般には認知されていないのだ。故に、魔法使いは魔法を秘匿する義務がある。バラした奴は魔法使いの組織によつて、記憶消去又は、酷いヤツはオコジョにされるらしいぞ？」

「・・・オコジョ？」

「怖いですね~。」

課せられる罰に怪訝な顔のレッド。ゾッとするヴァンプ。

そこから、麻帆良には沢山の魔法使いがいること、そこまで強くなすこと、魔法使いの組織が麻帆良にあること、<偉大な魔法使い>についてを簡単に教えてくれるエヴァ。

昼食をはさみ、魔法使いのタイプなどの戦闘関連の基礎知識を教わつた。

その後、夕食を食べ、外とほぼ同じ時間帯になるのに合わせて、別荘を後にする4人。

パアアアアアツー！

「この一瞬で景色が変わるのが凄いですよねー！まさに魔法という感じで！ねーレッドさん！」

「あー・・・はいはい。そーだなー。」

転移に興奮しきりのヴァンプに、呆れ気味のレッド。

エヴァと茶々丸は明日も学校がある為、このまま全員就寝となつた。

じつして、迷子のレッヂとヴァンプの麻帆良での最初の夜が更けていく。

（別荘で一夜明かしたが……。）

じつして、太陽は異郷にて休息を得る。

誤字脱字がありましたら、お知らせください。

11/12/7 誤字修正

Final Cut .06 (前書き)

10,000PV2,500アクセス突発！

皆さんに言いたい！

ありがとう！そして、ありがとう！

でも、ストックがなくなってしまったorz

別荘での一日を終えたレッドとヴァンプ。

朝食作りを通して仲良くなるヴァンプと茶々丸。

模擬戦を通して、レッドへさらに興味を持つエヴァ。

悪乗りするヴァンプとチャチャゼロに対し、麻帆良に来てついに初の説教（肉体言語込み）を炸裂させるレッド。

ここでの常識を色々と教わるレッドとヴァンプ。

別荘を出で、ようやくレッドとヴァンプが麻帆良に来てからの長い一日が終わるのだった。

- End -

別荘を出た翌朝、全員でヴァンプと茶々丸の合作の朝食を皆で済ませた。

登校の準備をする為、エヴァと茶々丸は一階の自室へと戻る。

学園長の所に顔を出さなくてはいけないレッドとヴァンプもエヴァ達に着いて行くつもりだが、特に準備はないため、そのままくつろいでいた。

しばらくすると支度を終えた一人が降りてきた。

「待たせたな。」

「お待たせしました。」

「一人とも可愛いね。」

「もう出発すんのか？」

「はい、そろそろ出ませんと通学ラッシュに巻き込まれてしまいます。私たちが向かうのは、女子校エリアですので空いている時間帯

でないとレッドさん達が辛いと思いますので。」

「あ～・・・、たしかに。キツいな・・・。」

「え? なんですか?」

女子学生のみの満員電車に乗るのを想像してゾッとするレッド。キヨトンとするヴァンプ。

「ウム、それに人混みなぞ嫌だからな。出るぞ。」

「了解です、マスター。」

「あいよー。」

「行つて来るね、チャチャゼロちゃん。」

「ケケケ、迷子二ナンカナンジャネーゾー。」

パタン・・・・。

四人はログハウスを後にした。

ログハウスがある森を出て、学園エリアに入る。

学園エリアの一番奥、女子校エリアに向かう。

まだ時間に余裕がある時間帯のせいか、登校している生徒はまだそこまで多くない。

多くは無い生徒達にチラチラとこちらを見ている。

女子校エリアにおいて、異質な存在が目を引いてしまう。

筋骨隆々な赤い覆面男と古代ローマ兵士の様な兜と紫のローブ姿の二人の男性。

明らかに浮いているレッドとヴァンプ。

「・・・予想はしてたがよ・・・。視線がキツいぜ・・・。」

「・・・?どーしたんです?レッドさん?」

「・・・お前の無神経さが羨ましいよ・・・。ハア・・・。」

「ククツ、私たちがいなければ、即通報だつたかもな?」

居心地が悪いレッドと、一向に堪えないヴァンプ。

そんな一人を楽しそうに笑うエヴァ。

どうフォローしていいか分からずオロオロする茶々丸。

そういうしている内に、麻帆良学園女子中学校に到着。

「ジジイは大概こここの学長室にいる。ほぼ女子中にのみ腰を据えているからな、変態ではないかと疑っているんだがな？今後用があれば此処に来るがいい。」

「組織のトップが変態なのか？・・・終わってんな～。」

エヴァに誤解を植えつけられつつ、玄関ホールを抜けた学長室に向かつ。

スーツに眼鏡の男性が学長室から出てきた。

近づいてくるエヴァ達に気づいた男性がこちらにやって来る。

「やあ、エヴァ、茶々丸君。おはよう。」

「フン、タカミチか。」

「おはようございます、高畠先生。」

「エヴァ、そちらの方々が？」

タカミチと呼ばれた男性は人の良さそうな笑みを浮かべる。しかし、その温和な笑顔の中に一瞬鋭い視線が混ざる。

「ああ、そうだ。赤い方がサンレッド。紫のがヴァンプだ。」

「始めてまして、タカミチ・T・高畠です。学園長の補佐とエヴァ達のクラスの担任をしています。」

「ほとんど出張ばかりのダメ担任だがな。」

「ハハハ・・・、耳が痛いね・・・。」

エヴァの皮肉に若干引き攣るタカミチ。

「初めまして、ヴァンプといいます。」

「・・・レッドだ。」

「約束の時間は昼前と聞いてたんだけど?」

「登校ついでに道案内してやつたんだ、感謝しぃ。」

「そうだね、麻帆良は大きいから、初めての人は大概迷うだらうしね。助かったよエヴァ。それじゃあ学園長はもう中でいるから、お二人はどうぞ中へ。エヴァ達はそろそろ教室に行くだろ?」

「そうさせてもらう。行くぞ茶々丸。」

「ハイ、マスター。それでは皆さん、失礼します。」

そう言い、エヴァは颯爽と、茶々丸はペコリとお辞儀して去つて行つた。

「失礼しまーす。」

「邪魔するぜ。」

「学園長、お二人が到着しました。」

エヴァらと別れたヴァンプ、レッドが学長室に入室する。その後ろにタカミチが続き扉を閉める。

「おうおう、よく来てくれたの。そこに掛けてください。」

学園長の指したソファーに座る二人。

「タカミチ君や、この書類を一人に渡しとくれ。」

「分かりました。」

そう言われて、テーブルに広げられた書類の数々。

「それらの書類は、この学園における身分の証明やうと、レッド殿の広域指導員の資格や、ヴァンプ殿の飲食店営業許可、店の所有権等などの一式じやよ。これで麻帆良では身分におけるトラブルは粗方何とか出来るじやうつて。」

「ここまでしていただけるなんて！ありがとう『ゼロ』さま～！」

（こんな書類、一晩で準備とか出来るもんか・・・。）

脅威の手際を見せ付ける学園長、感激したヴァンプを他所にぞりと書類に目を通すレッド。

「・・・ん？じこさんよ。どの書類も名前の箇所が空欄になつてんぞ？」

「おうおう、一人の名前を入れにやならんのじやがな？サンレッドとヴァンプといつ名前しか聞いておらんでの？どうするかお主等に決めてもらおうと思つて、空けておいたんじや。」

「ナルホドな。日本人みたいな名前じやなくてもいいのか？」

「構わんよ。ここには外国の人たちも沢山あるでな。そんなに違和感も無からう。」

「じゃあワタシは・・・、『ヴァンプ＝フロシャイム』でー・うふふ、格好よくなないですか？ワタシ、外国人みたいな名前に憧れてたんですね。あーじやあレッドさんは『内田 レッド』でいいじやないですか？かよ子さんも喜びますよー。」

「バツ・・・！？オメーッ！？誰がするか！ー！つてオイ！勝手に書類に記入すんじやねえええ！？」

普段からは考えられない俊敏さとパワーで勝手に記入するヴァンプ。

「レッド殿・・・？もう一度書類を手配しよつかの？」

「・・・いや、そこまで世話になんのもワリイからよ・・・。この

まあいいわ。」

「そうか、な、このまま書類は受理するからの。次は一人の仕事についでじゃが・・・。」

そう言い、傍に控えていたタカミチに田配せする学園長。

「レッジさんの仕事は僕が説明しよう。広域指導員つていうのは簡単に言うと、見回りの先生かな？これだけ大きいとトラブルなんかも結構あつてね。それらに対応するには腕つ節が必要なこともあるんだ。」

「ナルホドな・・・。自警団みたいなもんか。」

「そーなるかな、後で早速パトロールに行つてもらひつかひ。」

「説明はそれくらいかの？次は、ヴァンプ殿じゃ。」

「は、はい！」

「この後、簡単な料理を作つてもらい試食させてもらひ。それで問題なれば、店になる物件を見てもらひつかひの？」

「わかりました！お毎ごはんになるものを作りますね？」

「うむ、空いておる調理実習室を押されてあるでの。今から行くかね？」

「あ、献立も決めたいのでその方が嬉しいですね。」

「じゃあ案内の先生が来たら、早速移動しておくれ。今から呼ぶでな。」

「はい。」

早速電話する学園長。

「もしもし？ワシジじゃが、そ、つい、すぐ来てくれんかの？つむ、

頼んだそい。」

電話も終え、お茶を飲みながら待つこと少し。

「ンンン……ガチャ。

「失礼します、申し訳ありません、お待たせしてしまって。」

軽くウェーブの掛かつた髪の長い眼鏡の美女がやつて來た。

「紹介しようかの、こちらは源先生じゃ。」

「はじめまして、源といいます。」

「はじめまして、ワタシはヴァンプと申します。」

「レッドだ……。」

「じずな君、早速で悪いんじゃがの、例の教室に案内してやつとくれい。」

「はい、わかりました。それじゃあヴァンプさん、こちらへ。」

「ハイ。」

源先生に促され、席を立つヴァンプ。

「学園長さん? 用意するのはここにいる方々の分でよろしいですか?」

「うむ、美味しい匂いはんを期待しとるぞい?」

「ウフフ、頑張りますよ。それでは失礼します。」

二人はお辞儀して退室していった。

「それじゃあ僕らも行こうか? レッドさん。」「あいよ。」

今度はタカミチ、レッドが出て行く。

「それじゃあ、学園長。いつてきます。」

「フォツフォツフォ、頼んだぞい。」

「じゃーな、じいさん。世話んなつた。」

バタン。

誰もいなくなつた学長室。

「あの二人が果たして、この麻帆良にどういった影響を与えるんじやろうのぉ・・・。」

椅子に身体を深く沈めながら独り呟く学園長。

いつもしてレッドビアンプ、一人の仕事が始まる。

太陽が麻帆良を照らし始める。

なんとか、この週一回更新のペースは守りたいので頑張って書かな
やや -

誤字脱字ありましたら、指摘下せ。

11/12/7 修正

感想お待ちしております -

毎週週刊ペースが維持出来るか、戦々恐々です。w

しかし、中々に作中の時間が進まない（；、）

キングクリムゾンした方がいいのかな？

そんな不安を抱えながらの最新話です。

相変わらずの駄文ですがお楽しみ頂ければ幸いです。

麻帆良に漂着して一日。

生活の為の糧を得るため、学園長の部屋へ。

そこで出会ったのは、かつての英雄の一員、高畠・T・タカミチ。そして、学園長の手配により得た仕事。

学園広域指導員と飲食店経営。

レッドはタカミチと共に仕事のレクチャーのため、ヴァンプは経営させてもうつたため試食テストの仕込みを開始するため、学園長室を後にした。

- F i g u r e · 0 7 -

- レッドとタカミチのお仕事 -

大分、登校してくる生徒も多くなってきた時間帯。

まだ時間に余裕がある為、ゆっくりと登校する生徒が殆どだ。

そんな中、駅から校舎に向かう生徒達の流れに逆らつ赤と白の一人の男性がいた。

赤いマスクのレッドと白いスースのタカミチである。歩きながらタカミチが口を開く。

「僕達の仕事ってのは、学生間でのトラブルの対処が殆どなんです。

「そんなにトラブルが起きんのか?」

「ハハハ・・・、こここの生徒達は良くも悪くも元気が良過ぎてねー・

・・。」

遠い目をしつつ、頬をポリポリと搔くタカミチ。
そうして「」の内に、駅前の開けた所に出る。

「今はそれほどでもないんだけど、もつすぐ一気に混みだすんだ。
そうしたら僕らの出番です。」

「どんなことすりやいーんだ？」

「まあ、事故なら防止とアフターケア、ケンカなら無力化とかそんな感じで。今日は僕の仕事を見ててくれたらいでですから。」

「了解。」

広場に目を向けると、確かに徐々に人が増えてきている。

・・・しかも加速的に。

「オイオイ・・・、増えすぎだろ・・・。」

物の数分で広場は人ごみで溢れかえった。

「今くらいの時間から、遅刻間際の電車が到着するまでが一番多くなるんです！」

タカミチの説明を聞きながら、レッドは目の前の景色に絶句した。
そういうしていると、ある一角で大勢の男性が集まって騒いでるのをタカミチとレッドが発見した。

「んだあ！？ やんのかコラア！？」

「上等だ！コラア！後悔すんなよ！アアツ！？」

空手着と柔道着の団体が睨み合っている。

「また彼らか・・・。」

「また？前もあつたのか？」

「うん、・・・空手と柔道どっちが強いかつてしばしば騒ぎになるんだ。」

「しょーもねーなー。こいつ等は、『無力化』でいいのか？」

「ハハ、お手柔らかにね？」

一触即発の一団体の間にタカミチとレッドが割り込んで並び立つ。

「そこまでだよ、君達。」

スーツのポケットに手を入れたタカミチと首をボリボリ掻いて気だるそうなレッド。

急に現れた二人に驚いた彼らは更に騒ぎ出す。

「アアン！？何だテメーら！？マスクなんかしゃがつて！」

「おい、赤いヤツの後ろにいるの、デスマガネだ・・・。」

「デスマガネ！？アイツが！！？」

「いくらデスマガネでもこの人数なら・・・。」

デスマガネ・・・、それは広域指導員としての高畠・T・タカミチの異名である。

たつた独りで数十人の暴徒を鎮圧した際に付けられたものである。それ以降、チンピラなどには恐怖の代名詞になつている。

「君達？ここいらでお開きにしてくれるなら僕からは何もしないんだけどな？」

柔らかい物腰で解散を促すタカミチだが・・・。

「上等だあーー！デスマガネ倒して俺達が麻帆良最強だああつーー！」

。 その余裕な態度が、彼らの荒んだ心の火に油を注いでしまった・・・

リーダー格の男の怒号が掛け声となつて、一斉に襲い掛けつてきた！

「やれやれ・・・、元気だねえ。」

「こここの奴等は、こんなんばつかなのか？」

「ハハハハ・・・、否定できないなー・・・。」

苦笑しながら迎え撃つタカミチと、呆れながらのレッド。

ドサツ、バタツ！

糸の切れた人形のように倒れしていく

音も無くポケットに手を入れたまま周りを鎮圧していくタカミチ。

「（へえ？拳で居合いみてーなことやつてんのか？またマニアックな闘い方してんなー。あの速度と正確さなら、一般人にや何してつかわかんねーまま倒されんだろーな・・・。）」

「（あの赤いの、ボーッとしゃがつてーー！デスマガネは無理でもアソシならーー！）「うおおつーー！」

タカミチの戦闘スタイルを見ているレッドに不意打ちを仕掛けるのが数名。

「あん？大人しくしてりや怪我しなくてすんだのによ・・・。」

不意打ちの攻撃を氣だるそつに全て避けるレッド。
避けた際、全員に『コパン』を叩き込んで無力化していく。

「うおおおおー！テヒヒヒー？『コパン』の痛みじやねええーー？」
「つづつ……。」
「い、痛てえええ……。」
「頭骸骨が陥没したみてえな痛みが……。」
「おおおおお……！？」
「拳骨のが痛くないんじやねえか……？」

全員氣絶させて静かなタカミチと違い、レッドの方は痛みによる地獄絵図が出来ていた。

これから数多の不良を『コパン』で悶絶させる……、『デスマガネ』と双璧をなす最強の広域指導員『スマスク』が誕生した瞬間だった。

「つ、強ええ……。」

バタリ……。

結局、にらみ合つてた2グループまとめての大乱闘に発展したが程なく鎮火。

タカミチ、レッド共に無傷どころか息ひとつ乱してはいなかつた。タカミチがどこかに電話をしていく間にレッドは倒れてるチンピラ達を（引きずつて）道路の隅っこに片付けていた。

「『』はこれ位かな？このまま巡回を続けて行こつか。」

「『』はこのままでいいのか？」

「うん、救護班に連絡したからね。あとは彼らがやってくれるから。」

「そーか。んで？次はどう行くんだ？」

「巡回ルートがあつてね。軽く教えておこうかな。」「あいよー。」

そうして、二人は駅前広場を後にした。

最初のトラブル以降大した問題もなく昼前になつたのでヴァンプのいる調理実習室に向かつた。

- s i d o o u t -

- ヴァンプのお仕事 -

ヴァンプとしづな先生は調理実習室へと向かつていた。

「さ、こちりになります。ヴァンプさん。」

調理実習室に入ると、既に大概の食材は用意されていた。

「わー、スゴーいー。」んなに沢山あると、なに作るか迷つちやうなー。

」

用意された食材を見て、はしゃぐカリスマ主夫。

「ふふつ。本当に料理がお好きなんですね?」「ええ!生きがいですから!」

はしゃいだ所を見られて恥ずかしくて赤面しつつもキッパリと答え

る悪の幹部（笑）

「お料理のお邪魔になりますし、私は職員室に戻りますね。」

「あ、はい～！お皿、楽しみにしてくださいね？」

「ふふつ。楽しみにさせてもらいます。それじゃあ失礼しますね。」

独りになつたヴァンプは料理に取り掛かる。

・・・・・

・・・・・

・

ガラツ。

調理実習室の扉が開かれる。

「お～い、ヴァンプやつてつかあ～。」

「あ、レッドや～ん。そちらのお仕事は終えられたんですか？」

「お～、今日は軽くでいいんだと。んでいい時間だからよ、オレは直接こつち来た。高畑は学園長とか呼びに行つてるわ。」

「そーですか。こつちももう出来ますよ～。」

ガラツ。

再び扉が開かれた。

「ふおつふおつふお、やつとるかね? ヴァンプ殿。味見しに来たぞい。」

「「」馳走になりますね、ヴァンプさん。」

「いやあ、エヴァから美味しいって聞いてたから実は朝から楽しみなんだ。」

学園長、しづな先生、タカミチがやつてきました。

「あ、監さんよう」。「もう出来ちゃうの？」お座りになつてくださいね。」

「ウム、ワシら三人が美味しいと言えば合格じゃ。期待してるわ~。」

「はい~。」

会話しながらも全員分の昼食を準備していくヴァンプ。

「はい! お待たせしました。」

完成した昼食を配膳していくヴァンプ。

「今日は・・・、鯖の味噌煮と大根のお味噌汁、炊き込みご飯と小松菜のおひたし、白菜の浅漬けです~。」

「ほう、これは見事な!」

「ホント、美味しそうですわ。」

「珍しくエヴァが褒める訳だ。」

三人とも料理を見た反応はいいようだ。

「ホントは浅漬けじゃなくヌカ漬けをお出ししたかったんですけどね。たさ、冷めない内にじーぞ。」

「ウム、そうじゅの！正直もつ辛抱たまらんわい！」

「ええー早く食べましょー！」

「ふふ、学園長に高畠先生？慌てなくともお食事は逃げませんよ～」

辛抱できない一人に苦笑するしづな先生。

「んん、それもやつじゅ。では・・・。」

「「「「いただきます。」」」

ちなみに既にレッドは食べ始めている。

しばらくして、全員食べ終えた。

「いやあ、ヴァンプ殿！大変美味じゃった！」

「ええ、ホントに美味しかったですわ。」

「これは文句なしじゃないですか？学園長。」

「うむ！文句なしじゃわい！」

「やりましたよー！レッドさん！」

「あー、はいはい。オメテトさん。」

はしゃぐヴァンプを冷めた様子であしらひレッド。

「ヴァンプ殿、早速今から店の改裝と住居の手配をさせるから。また詳しいことは追つて連絡しよー。」

「ありがとうござりますー！」

「」

無事、審査を無事クリアしたヴァンプ。

レッドとヴァンプ、二人が麻帆良にて生活する準備が整い始めた。

「ふむ、あと一人に渡すものがあるんじや。」
「いらっしゃるです、どうぞ。」

学園長の言葉を受けて、しづな先生が一人に携帯電話を渡す。

「仕事用に渡しておくぞい。何かあつたらこの携帯にかけるからの。」

「わかりました。」

「レッズ殿は晩にもう一度来てもひつ。警備員として顔見せをする

でな。」

「あいよ。」

「では、これで解散じや。」

レッズとアランは学校を後にした。

誤字脱字、指摘や意見ありましたらいちお気軽にどうぞ。

書きあがつたので早速投稿！

お気に入り登録件数が伸びるのは嬉しいものです。皆さま、ありがとうございます！

今回はいつもよりチェックが甘いので、誤字脱字が多いかもしれません
せんが、お楽しみ下せー！

レッドとヴァンプは自分の仕事の為に行動する。レッドはタカラミチと広域指導員として。

ヴァンプは店を持つための試験を受ける。学園長達の舌を唸らさせ、合格する。

そして、二人は女子中学を後にした。

- Page . 08 -

麻帆良の街中を歩く、レッドとヴァンプ。

「フンフフーン」

「ご機嫌だなあ、オイ・・・。」

「だつてレッドさん！お店出せるんですよ？お店！」

「近えよーわかったからー顔が近えよーー！」

冷めたレッドに興奮冷めやらぬヴァンプ。

「んで？今からどーすんだ？」

「もうすぐエヴァちゃん達が学校を終える時間らしいので、この辺の商店街をプラプラして待つてろって。ワタシもこの辺のお店のことも知りたいですし少しプラプラしましょうよ、レッドさん。」

「へいへー。」

そして学校最寄の商店街に足を向ける一人。

しばらく商店街を散策していると・・・

「待たせたな。」

「お待たせしました、レッドさん、ヴァンプさん。」

エヴァ達が声をかけてきた。

「あ、二人ともお疲れ様。」

「で、どうだったのだ？店を持つかどうかの試験とやらは？」

「無事に合格出来ました～！」

「おめでとうござります、ヴァンプさん。」

「ありがと～、茶々丸ちゃん。」

盛り上がるヴァンプと茶々丸を他所に、レッドがエヴァに話しかける。

「悪いんだけどよ、今晚もエヴァん所に世話になつていいか？じいさんがよ、まだ家の準備が出来てねえんだよ。」

「ふむ・・・別に構わんぞ？」

「悪いな。」

そんな一人のやり取りを聞いていた茶々丸が話に割つて入る。

「なら今日の夕食の材料を買わなければいけません。」

「ふむ・・・ならば茶々丸はヴァンプと共に買い出しに行つて来い。」

「了解しました。マスターはどひなさるのですか？」

「一度レッドのバイクを超鈴音のヤツに見せよつと思つてな。ヤツにこれから向かうと連絡を入れておいてくれ。」

「了解しました。」

「よし、レッドよ。一端バイクを取りに戻るぞ。」

「いつてらつしゃい、二人とも。」

「お気をつけて。」

買い物の為、その場に残る茶々丸とヴァンプに見送られて自宅に向かうエヴァとレッド。

バイクを回収し、超鈴音のラボがある麻帆良大学エリアへと足を向ける。

「んで？ その超鈴音ってのはどんなヤツなんだ？」

「ふむ・・・、昨日言つたな？ 茶々丸の生みの親だといつのは。」

「おう、それは聞いたぜ。あく、『麻帆良の最強頭脳』だつだけか？ 「この麻帆良は世間に比べたら科学技術が優れているらしいが、ヤツは更に飛びぬけているらしい。」

「・・・？ ナンだよ、らしいって。」

「仕方なかろう。私は科学が苦手でな、今のはタカミチとかからの受け売りだ。」

「・・・ 信用できんのか？」

「心配いらんさ。ヤツは対価さえ払えればキチンと仕事はしてくれるやう。」

「まあ、実際会つてから考えるか・・・。」

そして、目的の超の研究所がある建物前までやつてきた二人。建物の方に視線を向けるエヴァ。

「む・・・？」

「どうした？ エヴァ？」

「ふむ、どうやら自ら迎えに来た様だな。」「あん？」

「待つてたネ、エヴァンジエリン。そちらの方がレッドサンで会つてゐる力？」

「わざわざ出迎えなくとも良からぬ。」 そうだ、今回、貴様に用があるのはレッドだよ。」「茶々丸の産みの親つづーからよお・・・、もっと博士つて感じの爺さんとか想像してたぜ・・・。」「フフフ・・・、こんな美少女だとは思わなかた力？」

「自分で美少女とか・・・。」「マア、茶々丸から粗方は聞いてあるワ。ラボに案内するネ。コッちヨ。」

超のキャラに圧倒されつ放しのレッドだったが、案内に従いラボに向かつ。

ラボに到着すると先導していた超がこちらを振り向く。
「ここの。オ、イー・ハカセー！連れて來たネー。」「はーい！」

そしてラボの中に入る人物に呼びかける。

「わつ！大きい人ですねえ～。でも、中にどうぞ！」

中から出てきたのは、黒髪おさげと眼鏡の少女。

そう言われレッドも視線を建物入り口に移す。

そこにいたのは二つの丸子頭の黒髪の少女だつた。

その少女はこちらに気づいたのか、こちらに歩いて來た。

少女の言葉に従い中に入る一行。

「では、改めて自己紹介ネ。」

「ホンと小さな咳払いをする超。

「フフフ、 - ある時はナゾの中国人発明家！クラスの便利屋！マッシュアイエンティスト！またある時は学園NO.01天才少女！そしてまたある時は人気屋台『超包子』オーナー！ - それがこの私、超鈴音ネ！ひとつヨロシクネ。」

ドーン！ - という効果音が聞こえてきそうな程の勢いで自己紹介を行つ超。

「お、おひ・・・・。よろしく？」

ちょっと汚き氣味なレッド。

「超さん、呆れられてますよ？あ、私は葉加瀬 聰美と/or/言います。ハカセと呼んで下さいね！因みに私も茶々丸の産みの親の一人ですよ。」

「オレはレッドだ、レジンじゃあ広域指導員つてのをやつてる。… 今田からだけどな。」

「それで？ 麻帆良でトップクラスの頭脳の我々を頼つて来るのは、一体どんな要件力ナ？」

レッドはこの少女達に何処までの事情を話して良いものか分からず、エヴァに視線を向ける。その視線を察したのか、エヴァが話し始め

る。

「！」から私は説明してやるつ。」

「「コイツともう一人いるんだが…、この二人は平行世界、または別次元からやって来た…、と言つたら信じるか？」

エヴァは「ヤリと、超とハカセを試す様な視線を一人に向ける。

「「…つ…！」」

驚愕の表情の二人。

「そんな！あり得ません！！」

「イヤ、ハカセ。魔法世界という実例もある。否定しきれないのも事実ではない力？」

「つ…いや、でも…。」

否定的なハカセを諭す超。尚もブツブツと思考の海に沈むハカセ。

「それデ？エヴァンジェリン？」

ハカセを置いて続きを促す超。

「ウム、その次元跳躍の原因が「コイツのバイクの様なのだ。」

そう言い、壊れたバイクを指差すエヴァ。

「茶々丸にも軽く見せたんだが、バイク自体はスペックこそ馬鹿げているがそんなに変わったものではないらしいんだが、大破している装置があるらしい。そいつが跳躍装置なのではないか？と言つて

いた。その装置を診て貰おうと思つてな。」

「そんな未知の技術力に触れられるー、科学者なら断る理由がないネ！わかつた、引き受けるヨ。」

「助かる。私は科学なぞサッパリだからな。」

「ならバ、早速今から調査開始といこつカ！しばらくバイクを預からせて貰うがいいかナ？」

「おう、よろしく頼む…。あと出来るだけ早く元の世界に戻りてえんだけどよ、やっぱ結構掛かりそうか？」

「フム、まだ診ていなかから何とも言えないヨ。どつしたのカナ？元の世界に待てているイイ人でもいるのカナ？」

「ヒヒと意地悪く笑う超。

「心配いらないヨ。もし、本当にこのバイクに次元跳躍の力があるとしたら、修復して戻る時に事故で跳んでしまった時間帯と同じ時間帯に戻れれば、元の世界で過ぎた時間はホンの僅かにならないカ？」

やけに的確なアドバイスを言つ超。

「そういつもんか…。」

取り合えず、納得するレッド。

「じゃあよ、そこまで急かすつもりもねーから、しつかり頼むわ。」

「任されたネ！」

そして、連絡先を交換して今回はお開きとなつた。

少し時を遡る――

レッドとHグアと別れたヴァンプと茶々丸は夕食の買い物出しに繰り出した。

「さて――じゃあ案内頼める? 茶々丸ちゃん。」

「はい、ここはいつも利用している商店街ですので、お任せ下さい。」

「

二人は献立の相談をしながら商店街を進む。

幾つかの店を回り、買い物も順調な二人に声がかかる。

「あれ? 絡繩さんや~。」

振り返った先には、茶々丸と同じ制服を着た、真っ直ぐな黒髪のロングヘアの少女がいた。

「こんちわ、近衛さん。」

ペコリとお辞儀する茶々丸。

「茶々丸ちゃん、お知り合いで?」

ヴァンプが尋ねる。

「はい、同じクラスの近衛さんです。」

「ウチ、近衛木乃香いいます。」

「ワタシは、茶々丸ちゃんの所で少し厄介になつてゐるヴァンプと

言こます～。近い内にこの辺でお店を出すからよろしくねえ。」

大人に丁寧に挨拶されて慌てる木乃香。

「あややーーー、じつはよろしくですーーー！所で、何のお店を出しますか？」

「うーん、まだ飲食店としか決めてないの。」

「そーなんですか、ほなオープンしたらさつと行きますね。」

「ありがとね～。」

しばし、三人で料理談義に花咲かせ一緒に買い物をして商店街で別れた。

「それじゃあね、木乃香ちゃん。」

「近衛さん、それではまた学校で。」

「楽しいお買い物やつたーおおきに、ヴァンプさんーほな絡繰さんもまた学校でー！」

茶々丸とヴァンプはレッド達よりも先に帰つて來たので、そのまま夕食の準備にはいった。

ガチャツ！カラソロロ。

「戻つたぞ。」

扉が開いた後、聞こえるのは主の声。

「お帰りなさいませ、マスター。」

「つむ。」

「また世話になるわ。」

「ヴァンプさんはもうお疲りですよ。」

パタパタパタ・・・

「レッドさん、エヴァちゃん」「苦勞様～！」

奥からエプロン装備のヴァンプが出てきた。

「晩ご飯、出来ますよ～。」

「…なんで他人の家でここまで自然に主夫でいられるんだよ、お前はよお…。」

そして四人で、ヴァンプ＆エヴァ・茶々丸合作ちらし寿司を堪能したのであった。

「そろそろ…か。」

食後にのんびりしていたレッド達だが、そろそろ学園長が言つていた『顔合わせ』の時間が近づいて来た。

「ウム、確かにそろそろ出んといかん時間だな。非常に面倒だが出るか。茶々丸、準備だ。」「わかりました。」

そして四人は世界樹前広場に向かう。

これから太陽は、麻帆良の夜の顔を知る。

誤字脱字、意見等はお気軽に感想まで！

今週は体調が悪かったんですが、代わりに（？）筆の調子が良かつたみたいですね。

過去最長の文章かな？

あと、ルビ振り機能を使い始めました。

しかもバトルパート有り。やっぱりバトルは難しいです。

それではお楽しみください！

レッドは『麻帆良の最強頭脳』と超 鈴音と接觸をとる。

バイクに着いていた謎の装置の調査、修復の為に協力を要請する。元の世界に帰る為に。

事故が発生した時間軸に跳躍すれば、時間経過も殆どないと超に、かよ子の事が心配だったレッドは一先ず安堵する。

一方ヴァンブは、茶々丸と買い物の最中に近衛木乃香と出会い、意気投合する。

夕食を終えた四人は世界樹前広場にて夜の警備員としての『顔合わせ』に赴くのだった。

—F i g u r e · 0 9—

夜の麻帆良を歩くレッド達一向。

「いちいち雑魚どもの都合に付き合わされるのは面倒だな。」

「ん？ 雑魚？ 他のそんなに弱えのか？ タカミチや爺さんはそんなで

もなかつたんじゃねーか？」

「あの一人はな。それ以外は鳥合の衆さ。その癖、正義だ理想だと五月蠅くて敵わん。」

「正義…ねえ…。」

「顔合わせって事は、自己紹介とか考えないとダメですかねえ？ レッドさん。」

そういうしている内に広場に到着。

どうやら自分達が最後だった様で、既に皆集まっている。スーツ姿の男女、シスター、学生、多くの人々が集まっていた。その中にタカミチもいて、こちらに軽く手を挙げて挨拶してきたので、レッドも軽く挨拶を返す。

そして集団中央にいた学園長もこちらに気づき、声をかけてきた。

「フォツフォツフォ、よく来たの。」

「何、時間通りじや。気にせんでいいぞい。」

今日の主題、新たな顔ぶれが登場したことによりざわつく周囲。様々な感情を乗せた視線に晒されるレッドとヴァンプ。

「ゴホン！ 静まるのじや！」

学園長の一括が響き渡り、静かになる周囲。

「諸君！忙しい中、集まつてもらひて感謝するべし。今回集まつてもらひたのは、皆に新しい仲間を紹介するためじゃ。レッド殿、前題まで前に出るハジだ。

「彼はワシの知り合いでな、広域指導員と夜の警備員をしてもらおうと思つた。彼の名は『内田 レッド』じや。裏での名はサンレッドと云ふ。よろしくしてやつとくれ。」

学園長の紹介に再びざわつく周囲。

「サンレッド？聞いたことがないぞ？」

「あの覆面は？なぜ素顔を出さないんだ？」

「本名なのか？」

そのざわつきに再度、学園長の一喝が響き渡る。

「コホン！！静肅に！！彼の身元についてほこのワシ！！近衛 近右衛門の名に誓つて保証しよう！一万が一、何かあつたとしても儂が責任を取る！」

この地に置ける最高責任者にそこまで言われては正面から不満を言うものはないくなつた。

静かになつたのを確認した学園長は続ける。

「心配はいらぬ。納得出来ん者は、今後の彼自身の働く姿で判断すればよ。よいな？」

周りは無言。その無言を肯定と捉え、話を進める学園長。

「では、彼の実力試しを行う。相手は誰にするかの・・・？」

そこにレッドが割つて入る。

「・・・爺さん、指名していいか？」

「ひょつ？構わんぞい？」

「悪いいな・・・。」

そつ言「レッド」は会場中央にて相手を指さす。

「俺は・・・、高畠・ト・タカミチを指名する。」

ザワツ！

無名の男が…学園長を除き、学園最強であり、かつて『紅き翼』に所属し、現在も『悠久の風』にて第一線で活動している英雄を指名して來た。

よつて、周囲からの目線も一気に険しいものとなつた。

「ククク！レッドのヤツ、態々周りの者共を煽りおつて。楽しくなつてきたな。」

その険しい視線の中で、唯一険しい視線を送つていない三人、エヴァが楽しそうな笑みを零す。

その横でレッドの心配をするヴァンプはオロオロしていた。

「レッドちゃん・・・、わざわざそんな事しなくても・・・。」

「僕で、いいのかい？」

呴えた煙草を吹かしながら前に進み出るタカミチ。

「ああ、じん中じやあお前さん位じやねーと意味がねえからな。」

レッドの強気な物言いに苦笑いするタカミチ。

「フフ、なりその期待に答えなきやいけないな。学園長、僕なら構いません。やらせて下さい。」

首と拳を「ゴキゴキ鳴らして準備するレッド。

両者が一定距離を保ち、広場中央で対峙した。

「本人からの指名じゃしの・・・、高畠君もああ言つとる事じゃし。よからうーー周囲の皆の衆ーー認識阻害、人払いの結界を各自強化してくれーー！」

周囲の魔法使い達が指示を受け取り行動に移す。

「よいか？あくまで腕試しじゃからの？ビビりかのギブアップかチエックメイトで終了じゃ。あまり派手な事はせんでおくれ。」

「わかりました。」

「あいよ。」

戦闘が始まる前の緊張感が一人の間で高まつていく。

それに呑まれたのか、周囲のざわつきも無くなり広場を静寂が支配する・・・。

その様子を見ていた学園長が大きく息を吸い込む。

「始めいつーー！」

合図と共に、スラックスの両ポケットに手を入れるタカミチ。

悠然と佇むレッド。

「来ないのかい？レッド君。」

「・・・やつだな。挑戦者から行くのが礼儀つてヤツか。」

そつと、レッドは無造作に歩いてタカミチに近づいていった。

「流石に無用心過ぎないかい?」

苦笑するタカミチ。

「なあーに、ホンの挨拶代わりつてヤツだ・・・よつとあー..」

レッドは拳を繰り出す!

ボツ!~!

氣や魔力の強化もない、ただのストレートが空氣の壁を貫く音がする。

「つーーー!」

無造作に繰り出されたパンチは予想よりも鋭く、速かつた為、タカミチは驚きつつも上半身を捻り回避。

「いやあ、レックリしたよ。」

「そりやどくも。」

「じゃあ今度はこいつの番だ!」

少し距離を取つたタカミチが腰溜めに構える。

パンツ!~!

タカミチの腕が僅かにブレたと思つた瞬間に軽い打撃音。

- 居合い拳 -

ポケットを鞘代わりにし、拳圧を撃ちだす戦闘技法。近く中距離を得意としている。無音拳とも言われる通り、音も無く撃ちだされる拳圧は魔力や氣ではなく『空気の塊』な為、視認が極めて困難で回避し難い攻撃となつていて。

タカミチの戦闘スタイルを知るギャラリー達は、レッドが成す術もなく喰らつた音だと思った。

しかし！レッドはその視認が困難な拳圧を殴つた、迎撃した音だつた。

これにはタカミチが驚いた。

「まいったな、初見で迎撃されるなんて初めてだよ・・・。」

「確かにな。ありやあ見づらいわ。でもよ、初見じゃあねえからな。」

「初見じゃない・・・？居合い拳の使い手との戦闘経験があるのかい？」

パンツ！パパパパパンツ！！

再度タカミチからの攻撃。今度は单発ではなく連射。

「いや、戦うのは初めてだな。」

やはり全てを迎撃しながら前進するレッド。

「・・・どうことだい？」

再度距離を取りつつ、怪訝な表情のタカミチ。

「今朝、チンピラ相手に使ってたる? それ。
「・・・つー!」

今度は驚愕の表情を浮かべ、動きが止まるタカミチ。
更に距離を詰めるレッド。

「あれだけで見切つたつていうのかい?」

「攻撃直前のモーションさえ何度も見れりや、後は大体何とかなん
だろ。」

「・・・普通は何ともならないんだけどな・・・。」

呆れるタカミチ。

「それより大丈夫か?」

「何がだい?」

「そこは俺の距離だぜ?」

「つー?」

残っていた距離を石置が爆ぜる程の踏み込みにより、一步で詰める
!!

「オラアー!!」
「くつー!!」

再度レッドの拳が繰り出される!

居合い拳は至近距離に適しておらず、守りに徹するタカミチ。
連撃の隙を縫い、高速移動術『瞬動術』で距離を取る。

シヨツー！

「お？ ワープか？ スゲエな！」

パパパン！

再度、タカミチからの固い拳による牽制。レッドは迎撃ではなく、回避で距離を詰める。

「そんだけ撃たれれば、嫌でも慣れちまうぜ？」

「これだけ早く順応されちゃうとシヨツクだね。」そのままじや君の力も測れないし、ちょっと本氣でこつかな。」

「ようやくかよ？ 待ちくたびれたぜ。」

「フフ、悪かつたね？ 左腕に『魔力』、右腕に『氣』、合成！！」

タカミチの胸の前で両の掌をかざす構えを見てエヴァが呟く。

「やはりアレを出すか・・・、タカミチ。」

「マスター、『アレ』とは？」

「ヤツが死に物狂いで体得した、本来反発する魔力と氣を融合させ、爆発的な能力向上を引き出す究極技法、『氣と魔力の合一』、またの名を『咸掛法』といつ。」

「むうーー皆の衆ーー防護結界も強化するんじやーー早くーーーり、了解しましたーー！」

咸掛法の発動を確認した学園長も即座に周囲に指示を飛ばす！

キキキキキキキキキキ・・・・・・・・

身体にオーラを纏わせたタカミチが再度ポケットに手を入れる。先ほどまでとは段違いのプレッシャーを感じるレッド。

「んな面白そーな隠し玉持つてなら出し惜しみしてんじゃねーよー。」

「ええ、最初から出しておけばよかつたかな。ここまで心躍るなんて久し振りだ。それじゃ一発目はサービスです。避けて下さいね？」

豪殺！－居合い拳！－

ド、ゴンツツ－！

石畳に覆われていた広場に巨大なクレーターが出来た。

先ほどまでの居合い拳が連射重視のマシンガンだとしたら、今の居合い拳は威力重視の大砲の様だった。

そのあまりの威力にレッドは・・・・、笑っていた。

「ははっ！－いい物持つてんじゃねーか！－楽しくなつてきたぜ！－！」

「期待に添えられた様で何より！－・・・ハアツ！－」「オラア！－！」

豪殺！居合い拳！－

その暴力的な拳圧をレッドは、再度正面から叩き潰した！－

ド、ゴンツツ－！

「つ－－なんて出鱈目なパンチだ！－！」

タカミチは驚愕しつつも牽制二度、居合い拳を連射。続けて豪殺居合い拳を織り交ぜる。.

パパパパパンーー、アゴンーー！

流れ弾が結界に触れる度、結界は軋みをあげ、術者達は苦悶の声を漏らす。

それほどの威力。

回避と迎撃を行なながらレッジは叫ぶ。

「やつわー、言つとくけどな？」

迎撃を、回避を豪殺居合い拳にのみ絞り、無造作にしかし、最短距離を被弾しながら直進するレッジ。

「こん位なら、俺にや効きやしねーぜ？」「なつー？」

再度、至近距離に持ち込んだレッジ。もう一度瞬動で距離を取るタカミチ。それに驚異的な脚力で追いつくレッジ。

「もつ逃がさねーよ。」

ポケットから両手を出し至近戦闘に切り替え様とするタカミチに、レッジは叫ぶ。

「一発目はサービスだ、腹に力込めて、歯あ食いしばりな。」「・・・・・」

「オラアツ！」

レッドがボディヘッパーを見舞う。

直後、強烈な衝撃がタカミチの腹部を襲う……。

ゴツー！

「うう……あつー！」

片膝をついて苦悶の表情のタカミチ。

「お？ ホントに耐えたのか？ やつぱアンタ凄えよ。」

「ぐ・・・ふう、咸掛法での最大防御を・・・、ブチ抜いてここま

でダメージが通るなんて、本当に非常識な拳・・・ですね・・・？」

「・・・そつか？」

ポリポリと頬を搔くレッド。

「学園長・・・、僕のギブアップです・・・。」

「・・・…これまで…」

「ほひよ。」

「・・・スマナイね。ちょっと脚にキテ立てそうになかったんだ。」

「

タカミチに肩を貸すレッド。

「これで実力も証明された。今宵からレッド殿は我らの仲間…よいな?」

誰からも不満の声は上がらなかつた。

「ちよつといいか? 爺さん。」

「なんじや? レッド殿。」

レッドは周りを見渡したあと、大きな声で言つた。

「いきなり新参者を信用しりつてのも無理な話だし、俺も人付き合ひが苦手でよ。だから不満があんならよ、直接言いに来てくれ。それが言葉でも拳でもどっちでもいいからよ。俺はそれを真正面から受け止める。あとは信用は仕事で得るからよ。そんだけだ。じゃあな。」

そう言い、肩を貸したタカミチの案内で治療所にタカミチを連れて行く為、レッドは立ち去つた。

その不器用ながらも一生懸命こちらとの関係を築こうとしている様は周囲の魔法使い達の険悪な雰囲気を少し、和らげるのだった。

それを見届けた学園長は声を高らかに告げる。

「では、今宵はここまで…解散じや…。」

場所は変わり、魔法使いの診療所。

「はい、これで大丈夫です。」

当直の治癒術士が治療を終え、退出する。

「便利なモンだな、魔法つてヤツは・・・」
「ええ、でも同時に危険もありますから。」

スーツを着なおしたタカミチと、付き添つていたレッドは診療所を後にする。

すると、そこにはエヴァ・茶々丸・ヴァンプの姿があった。

「遅いぞ、貴様ら！ いつまで待たす気だ！」

「お体は大丈夫ですか？ 高畠先生。」

「レッドさん！ 心配しましたよー！ でもワタシ達とはあんなに眞面目に戦つてくれないのでーズルイですよー！」

「あー、うつせーうつせえよヴァンプー！」

「なんだい？ 心配してくれたのかい？ エヴァに茶々丸君？」

「心配なんぞしとらんわー！」

「先ほどまで、マスターは落ち着きなくソワソワとしていました。」「茶々丸！？ ええい！ 余計な事を言つなー！ 卷いてやるー！」
「いけませんー！ マスターーーー！ そんなに乱暴に巻かれてはー！ ああああー！」

「ははは、相変わらず素直じゃないなあエヴァは。」

「タカミチもつるさいわー！」

「なあ、高畠さんよ？」

「なんですか？ レッドさん。」

「俺の事はレッドで構わねえよ。」の後どうだい？ 一杯。」

クイックと杯を飲むゼスチャーをするレッド。クスッと笑うタカミチ。

「じゃあこっちもタカミチで。いいですね、じゃあ行きつけの飲み屋に行きましょうか。」

「おお！話が早いな！敬語も堅つ苦しいから、なしなー。」

「わかった。」

「ズルいぞ！レッドにタカミチ一人だけで盛り上がりおつて！！！

私も混ぜんか！！！」

「そうですよ！レッドさん！」

「嗚呼・・・、マスターがとても楽しそう。」

こうして五人は居酒屋に繰り出した。

（注：エヴァは幻術で大人の姿になつて）

これを機に、レッドとタカミチはちよくちよく呑みに行く間柄になる。

こうしてレッドはこちらの世界での友を得る。

この時の飲み会は明け方まで続き、大いに盛り上がった。

余談だが・・・、レッド・エヴァ・タカミチ・ヴァンプは翌日、二日酔いと寝不足で朝から大変だった・・・。

太陽は麻帆良にて力を示す。

ルビ振りを使い始めたので、誤字脱字が増えてそう・・・。

誤字脱字、『指摘に意見はお気軽に感想まで。

祝！10話目！—メリークリスマス！—

なんとか続けることが出来たのは、皆さんのお陰です！—ありがとうございます！

これからも頑張っていきますよー！

レッドのもうひとつ仕事『夜の警備』。その仕事に携わる人々への顔見せと腕試し。

その為にレッドは世界樹前広場にやつてくる。

そこにいたのは多くの麻帆良の裏の顔に携わる人々・魔法使い・彼らに実力を示すため、麻帆良の最高戦力であり、英雄である高畠・T・タカミチを指名。

居合い拳の使い手タカミチを終始圧倒し、彼の本気『咸掛法』を引き出させる。

それすら正面から叩き潰し、周囲の人達に実力を示したレッドは言う。

「文句があるなら正面から来てくれ。受け止める。信用は仕事で得る。」と。

腕試しを通じて意気投合するレッドとタカミチ。

そこにエヴァ達を交え居酒屋で宴会して夜は更けていくのであった。二日酔いというオマケつきで。

- Figure · 10 -

「ヴァンプのお店へ

少し時間は遡り、早朝。

「全機能オールグリーン。スリープモードから通常運転に移行します。」

昨夜の宴会の影響が全くない茶々丸が行動を開始する。

「昨夜は遅くまで盛り上がりまして、朝食は軽いものにしておきましたよ。」

朝食の準備に取り掛かる茶々丸。
いつも自分と同じ位にキッチンに出でてくるパンがいない」とこ
気づく。

「一日酔いかもせんね。お水を持ってきて差し上げましょ
う。」

水差しを持って、ヴァンプにあてがつてくる客室に向かう。

「ンンン……

「はあーーー……。」

中からか細い返事が聞こえる。

「失礼します、ヴァンプさん。」

ガチャリ。

「いつも降りてくる時間に降りてこられたので様子を見に來
ました。」

「ありがと、茶々丸ちゃん。」

「こちらにお水を置いておきますので。では朝食の準備に戻ります
ので。」

「「あんね、ワタシもすぐ行くから。」

水差しを置いた茶々丸はキッチンへと戻る。
朝食を作っていると、次に降りてきたのはレッドだった。

「あー……、頭痛でえ……。」

「おはよひびきります、レッドさん。」

「あー、おーっす……。」

「じうん。」

茶々丸は一日酔いの薬と水をレッドに差し出す。

「お、悪いな。ついでになんか軽いの頼むわ。」

「ぱー、もうすぐ出来ますので少々お待ちください。」

「消化に優しいお粥にしました。いくらかトッピングも用意しましたので、お好みでどうぞ。」

「サンキュー。そういうや、ヴァンプはビールした? やつぱー一日酔いか?」

「ええ、大分辛そうでしたのでお水を持つていきました。」

「アイツ、弱い癖に飲みたがるからなー。ま、自業自得だな。」

お粥を美味しそうに食べるレッド。

「」馳走さん! んじゃあ俺はボチボチ出るわ。」

「わかりました。ヴァンプさんにこの鍵を渡してありますので。」

「ホント悪いな。じゃあな。」

「はい、いってらっしゃいませ。」

レッドを見送った後、茶々丸は主人の様子を見に行つた。

「失礼します、マスター。」

「ケケケ！ オウ、妹ジャネーカ！」

「姉さん、こちらにいらしたんですか。」

「うう、茶々丸か・・・。チャチャゼロをどうにかしてくれ・・・。」

「姉さんが何かしたんですか？ マスター。」

「酒盛りに参加出来なかつた腹いせに、一晩中笑い続けおつた・・・。」

「ケケケケケ、従者ヲ放リツパナシナゴ主人ニ、オ仕置キシタダケダゼ？」

「そろそろ起きないと学校に遅れてしまします。」

「くうう、忌々しい呪いめ・・・！」

エヴァは自身に掛けられている強制的に対象者を登校させる呪い『登校地獄』に憤る。

「何とか・・・、準備する・・・。他の準備は任せたぞ！..！」

悲壮な叫びではあるが、ただの一晩酔いである。

「了解しました、マスター。」

「あと・・・、そのアホ人形も連れて行け！..！」

チャチャゼロを扉まで戻っていた茶々丸に投げつける。

「ケケケ、マタ子守唄ガ欲シクナツタラ呼ンデクレテイーゼ？ ケケ

ケー！」

「早く・・・、連れて行け・・・！」

「わかりました。」

パタン。

「姉さんは自力では動けないのに、どうしてマスターの寝室に？」
「ン？ 昨夜帰ツテ来夕時、酔ツ払ツタゴ主人ガ自分デ連レテツタン
ダヨ。」

「そうでしたか・・・。」

「宴会ナラ混ザリタカツタゼ。」

「きつとまた機会がありますよ。」

その後、なんとか準備を終えたエヴァが出てきた。

「ま、待たせたな。」

「ギリギリダゼー？」

「朝食を摂る時間が無くなつてしまつましたので、学校に着いてからにしましょう。」

「レッズドヴァンプは？」

「レッズさんは既に出ております。ヴァンプさんはまだ寝ておられます。」

「そうか。よし、いくぞ。」

「姉さん、ヴァンプさんとお留守番よろしくお願ひします。」

「任シトケー！」

パタン

「ツッテモ起キテ来ルマテ暇ダナー。」

「うう、大分マシになつた・・・。」

10時を過ぎた頃によつやくヴァンプが降りてきた。

「ケケケ、酷エ面ダゼ?」

「あ、チャチャヤゼロぢやん。おはよつ。おはよ。」

「モウ、ツックー出掛ケチマツタゼ。」

「そつかー、悪いことしちゃつたなあ。」

悪いこと罪悪感を覚えてしまつ、悪の組織の将軍。

茶々丸の作つておいてくれた朝ごはんをチャチャヤゼロと雑談しながら食べ終え、洗い物を済ませた頃にヴァンプの携帯が鳴る。

「電話ダゼー?」

「はこはい、今出ますよ~つと。もしもし、ヴァンプですが・・・。」

「おお、ヴァンプ殿か?近衛じやが・・・。」

「ああ、学園長さんーどうなさつたんです?」

「店の方が一段落ついたでな、ヴァンプ殿に一度見てもうあつと困つての。」

「ーーホントですかー?行きますーこれからお伺いしても

?」

興奮冷めやらぬヴァンプ。

「勿論、構わんぞい。では待つとるから。」

ガチャツツーツー・・・。

「直ぐに準備しないとー。」

「マタ留守番力ヨ・・・。」

すると寂しそうな（と書つても無表情だが・・・）チャチャゼロが視界に入った。

「チャチャゼロちゃんも行く？」

「イイノカ？」

「戸締まりをしっかりしておけば大丈夫でしょう！」

「オウ！着いて行クゼー！」

それからトートバッグ（トトチャチャゼロ）を担いだヴァンプがしつかりと戸締まりを確認してから出掛けで行った。

ヴァンプが学園長室に到着。

コンコンコン・・・。

「失礼しま～す。」

「おお、随分早かつたのう。」

「もう嬉しくて、張り切つてしましました～。」

「ほつほ、そうかそうか。」

そう言つた学園長は書類と地図をヴァンプに渡す。

「（こ）がヴァンプ殿の店じやよ。店の一階に住める様にしとるよ。」

「何から何までありがとうござりますー。」

「今、業者が入つとるから。直にライフラインも通るやい。今から見に行つてみるかの？」

「はーー。」

部屋を出ようとあるヴァンプは扉を開けようとしたが、それよりも先に扉が開く。

「おーじジジイー！茶を飲ませるーーー！」

サボリに来たエヴァがやつて來た。

「ム？ヴァンプか？」

「あ、エヴァちゃん。」

「ヨウ、『主人。』」

「ん？チャチャチャゼロもいるのか？ビロだ？」

「ハハダ、ハハ。」

ヴァンプがトートバッグからチャチャチャゼロを出してあげる。

「二人はどうしてここにいるんだ？」

「ワタシ達はねえー、これから自分の店を見に行く所なの。エヴァちゃんは？」

「サボりだか？・・・ふむ、面白そうだ。私も着いて行こう。」

勝手に同行を決定するエヴァ。

「おお、なら調度ええわい。エヴァや、ヴァンプ殿を案内してやつとくれい。」

「む、まあいいだろー。地図を貸せ。・・・ふむ、よし行くわ。」

そう言い出て行くエヴァ。

慌ててバックにチャチャチャゼロを入れて、後を追いかけるヴァンプ。

「お邪魔しましたー。」

そしてエヴァ先導の元、やつて来た一軒の建物。
最後にもう一度、地図を確認するエヴァ。

「ん・・・、ここで間違いないな。」

中から業者が出てきた。

「ヴァンプ様ですね？」この仕事を担当させていただいている者です。
「案内しますのでどうぞ、中へ。」

「あ、はい。」

中に入る一行。

「・・・ど、なつます。何か質問はありますか？」

「ん、特にありませんね。」

「そうですか、水道・ガス・電気は既に通してありますので。こちらが鍵になります。それでは失礼します。」

「はい、お疲れ様です。」

そうして業者は帰つていった。

「じつへエヴァちゃん、チャチャチャロロちゃん。ここがお家と店かな
るんだよ。」

「なかなかいい立地じゃあないか？」

「デント店ースルンダヨ?」

「うん、学生さん向けの定食屋さんかな~って。晩はお酒もだそつかな?」

「ふむ、楽しみにさせてもらひつか?」

「飲ミ~! 来ヨウゼ!」

「是非来てくださいよ~。エヴァちゃんには一杯お世話になつたから、サービスするよお~。」

そして生活に足りてない物をチョックするヴァンプ。

「うん、少し買い出しだすれば大丈夫かな? 今日から住めそう。」

「・・・そうか。」

(ン~。ゴ主人、モシカシテ寂シガツテンノカ・・・?)

「あ、エヴァちゃんはお皿まだでしょ?」

「ん? まだだな。今日は茶々丸も準備できなかつたと言つていたしな。」

「じゃあ、ワタシが作るよ。」

「いいのか?」

「うん、ここの中も使っておきたいしね。その代わり、買出しに付き合つてね?」

「それ位なら構わんぞ。」

「じゃあ早速行きましょ~!」

戸締りをして、買出しに出るヴァンプ・エヴァ・チャチャゼロ。

「あ、茶々丸ちゃんに連絡とかなきや。今は授業中かな?」「あと少しで昼休みになる。その時に連絡すればよから~。」

先に買出しを済ませ、茶々丸に連絡を取つたヴァンプ達は再び店に

帰ってきた。

そして早速調理を開始するヴァンプ。

「はい、お待たせ。エヴァちゃんが始めてのお客さんだね。」

そう言い、エヴァの座った席に出来上がった料理を運ぶヴァンプ。

「はい、炒飯と中華スープだよ。『ゴメンねえ、簡単な物で。』

「構わん。美味ければ文句はない。お前の腕は知っているからな。」

「ありがと。」

「ところで、この店は何という名前にするんだ?」

「ん~、フロシャイムは入れたい・・・かな?組織の名前だから選
着あるしね。」

「まあ、せいぜい潰さない様に頑張るんだな。ああ、学校が終わつ
たらチャチャゼロを回収に来るからな。」

「じゃあそれまで預かっておきますね。」

「うむ。」

「ケケケ、頑張ッテオ勉強シテコイヨ~。」

「煩いわ!」

「いってらっしゃ~い!」

そして昼食を平らげたエヴァは学校に戻つていった。

その後、ヴァンプはチャチャゼロの話相手をしながら今日から住める様に準備を進めていくのであった。

「あ、レッドさんに知らせておかないと。」

ヴァンプはレッドに電話する。

ブルルルル・・・ガチャ

「あ、もしもしし〜レッドさん? ワタシワタシ〜〜〜え? オレオレ詐欺? 違いますよ〜! ヴァンプです〜。・・・え? 分かってる? も〜! なら最初から・・・え? あ、用件? はいはい。学園長さんからですね、お店をお借りできました! ですので場所をお教えしておこづかと。あ、そうですそうです。ワタシ達の住居も兼ねてますんで・・・、ええ。レッドさんもお昼まだでしたら一度こちらに来ていただけたら、はい。あ、場所はですね・・・。」

場所を伝え終え、電話も終えるヴァンプ。

「も〜、あんなに怒鳴らなくともいいのに〜・・・。」

「レッドガ来ンノカ?」

「うん、お昼食べに来るつて。」

そして作業を再開するヴァンプ。

これが、後に麻帆良にて知る人ぞ知る隠れた名店『定食処フロシャイム』の小さな第一歩だった。

年内にもう一度更新できるかな?

感想・誤字脱字・指摘・意見お待ちしております!

EXTRA · 01 (前書き)

皆様、今年はお世話になりました。

この様な駄作者の作品にお付き合いいただきまして感謝です。

来年も頑張つて更新していきたいと思うのでよろしくお願ひします。

そしてなんとか間に合つた！出来立てホヤホヤの年末特別編です！
いたいた感想で、他の怪人が見たいとの意見を何度もかいだいた
ので出してみました。

過去最多登場人数の話になりました。

年始から本編再開となります！

「これはまだ、レッドとヴァンプがバイクでのトラブルに巻き込まれる前の話。

EX · 01 (番外編)

「師走……、それはどんな人だらうと忙しく走り回るという時期。そんな師走の最後を飾る大晦日の出来事だった。

「JCIは世界制服を企む悪の組織『フロシャイム』川崎支部。その一室、作戦会議室。

「クツクツクツクツク……、揃つてあるか？ 我がフロシャイムが誇る精銳達よ……。」

そう呼び掛けるのは、古代ローマ兵の様な兜に紫のローブ、大きくFマークが入った盾に槍を持った人物——、ヴァンプ將軍である。

その呼び掛けに呼応するかの様に、数多の異形の戦士達が蠢く。その様子に満足したのか、大きく頷くヴァンプ。そのまま一体の怪人に話しかける。

「ゲイラス！ 各種交通機関への対応は！」

呼ばれたイカに翼の生えた怪人ゲイラスが答える。

「はっ！既に連絡を終え、押さえてあります！」

うむ！モスキー！作戦を発動させる建築物の確保は！」

巨大な蛾の怪人が返事をする。

「さあー、そちらの手箋も整つておつまみすー。」

「ニモ！ナイト川！我らが宿敵、サンレッドの行動は把握して

「はい！最も信用できる情報筋からスケジュールを聞き出し、完全に把握しています！」

情報
さん

「エヘヘ 話は頼りになる部下達よ・・・」
「ははあつ！」
「作戦名SKR！開始！」
「作戦実行メンバーに各

「作戦名SKR！開始！」

卷之二

散り散りになる怪人達。

それを見送つたヴァンプは咳く。

「クツクツクツクツク・・・、首を洗つて待つているがいい！サンレッドよ・・・。」

某県某所とある温泉街にて

「わあ、素敵な所じゃない」

「おお、悪くねえな。ただ・・・、」

「喜んで貰えて何よりですよ～！」

「コイツ等がいなけりやな・・・。」

レッドとかよ子は温泉街に来ていた。

ヴァンプに川崎支部の慰安旅行面子に空きが出たので、無料だし一緒にどうか?と誘われたのだ。

「『ラッ！アンタ！折角誘つて頂いたのにそんな言い方しないの…』

「へ～へ～。」

「まあまあ、かよ子さん。あ～見えて来ましたよ～あの旅館です～」

ヴァンプが指を指している先に一軒の旅館。

周りの旅館と見比べても明らかに豪華さが違う。

「お、おい、ヴァンプ！ホントにあの旅館なのか！？マジで無料なんだらうな！？」

「ええ、もちろんですよ。接待費で落ちますから。」

「アンタ、無料無料つて恥ずかしいわよ？」

かよ子に後頭部をペしりと叩かれるレッド。

そういうしている間に旅館に到着。

豪華な玄関口にて出迎えられる三人。

「予約してあるヴァンプといこますが～。」

「遠路遙々、当旅館へようこそお出でくださいました…わたくし、お疲れでしょ。早速お部屋までご案内させていただきます。」

係りの者に案内されて、客室に入る一行。

「スッゴーコイー！アンタ！凄い眺めよ…！」

「おお、スゲエな…。」

「ありがとうございます。この風景は我が宿の白樺の一つでござります。夕食のお時間まではしばらくありますので、よろしければもう一つの白樺の露天風呂など堪能いただければと思います。それでは。」

係りの者が退室する。

どうせ風景を堪能するなら露天風呂といつて一人は早速温泉に入りにいった。

（女湯）

「はあ・・・、生き返るわあ。景色もお湯も最高。しかも貸切状態なんて贅沢だわあ。」

（満悦なかよ子）

「あの人も堪能してるかしら？」

（男湯）

「ああ・・・、生き返るわあ・・・。」

レッドも命の洗濯の真つ最中であった。

「ええ、ホントに。」

なぜか真横にヴァンプもいるが……。

「なんで真隣に来んだよ……。」

「いやじゃないですか。若い子達はワタシがいたらくつろげないかな～って。」

「知るかっ！？」

一人の空気が危うくなってきたのを察した戦闘員1号2号が仲裁に入り、事なきを得る。

そして夕食。

係りに案内されたレッドとかよ子は大広間に案内される。そこにはフロシャイム川崎支部の主な面子が集まっていた。

「あ～つー遅いよレッドー！ ブッ殺すよおー！」

「レッド、コロコロー！」

「げ、ウサ公かよ……。」

いきなり物騒なことを言ひ放つぬいぐるみ型怪人のウサコッシとヘルウルフ。

「コラコラ、ウサコッシにヘルウルフ。もつすぐじ飯だから座つてなさい。」「う・・・、わかりましたあ～。」

しょんぼりとするウサコッシにかよ子が話しかける。

「ウサちゃん、私の隣に座る?」

「え! いいんですか! ?」

落ち込みから一転、『機嫌のウサコッシ。

そんなこんなで、場が落ち着いたのでヴァンプが宴会開始の音戸を取る為に前に出る。

「え~、今年一年お疲れ様、皆。今田は無礼講だから。でもかよ子さんとレッドさんには迷惑を掛けないよ! うー!」

「はーい! 」と周りが返事を返す。

「それじゃあ、大いに騒いで英気を養つてねー! 来年こそ、サンレッドをぶつ殺そうねー! 」

「そーいつのは本人のいない所で言えよ・・・。」

「乾杯! !

「「「かんぱーい! !」」

そんなレッドの弦きは乾杯の音頭でかき消された。

→メダリオ・カーメンマン・ウサコッシ組

「浴衣姿のかよ子さん、レベル高ええー! !」

「あんまジロジロ見てんじゃねーぞ。レッドに殴られても知んねーぞ。」

「せうだよーかよ子さんをイヤラシイ田で見たら、ぶつ殺すよー! !」

顔を赤らめるメダリオに突つ込むカーメンマン。

かよ子を守る為、奮起するウサ「ツツ。

「アントキラー・モギラ・モグラ」

「あ、美味い。」

「あ、ホントだ。いやあ、美味いツスね。アントキラーさん。」

「『美味いツスね』。じゃねよお。実際、美味んだよ（笑）

」

のんびり料理に舌鼓をうつ。

「アーマータイガー・ヨロイジシ・デビルネ」

「美味しいね。あ、これこれは食べられないから一人にあげるね？ボク、通風で止められてるから・・・。」

「ネコ君、また身体が・・・わかつた！こっちから好きなのを取つてくれ！」

「うむ、こちらからも取つていいでゴザルよ？」

「アリガト、アーマータイガー、ヨロイジシ。」

デビルネコの世知辛い食事制限をフォローするタイガーとヨロイジシ。

「ギョウ・ガメス・ゲイラス」

「はつ！温泉宿で合コン！？アリじやない？ガメス？」

「こんな時位、合コンは忘れましょうよ、ギョウさん。」

「ムリムリ、ギョウは集団お見合い（笑）が大好きだから。」

新しい会員の形を模索するギョウに呆れる一人。

～モスキー・ナイトール～

「今回の慰安旅行、マジパネエ！超極楽じゃね？」

「ホント凄いですね！あ、ヴァンプ様にお酌とかしに行つた方がいいですよね？」

「お？行っちゃう？いいね！俺も行くし？」

後輩としてお酌しに行こうと立ち上がるナイトールとモスキー。

～レッド・カヨ子～

「ほりアンタ、乾杯。」

「おう。」

（アイツ^{メダリオ}・・・、あとで一発ぶん殴るか・・・。）

二人は周りの喧騒を眺めながら乾杯する。レッドがそんなことを考へると・・・、

「せんぱ～い！飲んでますか～？」

ナイトールがやつて來た。

「んだよ・・・、ナイトマン～？」

「も～！ナイトールですつてばー！それ、まほ一杯。」

ビールを注ぐナイトール。

「お、悪いな。」

「それじゃあ、僕は他の先輩方にお酌してきますんでー。」

立ち去るナイトール。

その後、次々にお酌に来る怪人たち。

宴会も大いに盛り上がりつて来た辺りで、除夜の鐘をBGMに年越しを迎えた。

ほろ酔いのヴァンプが前に出て深々と口に頭を下げる。

「あけましておめでとうござります。」

「「「あけましておめでとうござりますーーー。」」」

新年の挨拶を皮切りに、更に盛り上がる宴会。

「アンタ、悪いけど先に寝るわね？」

「おうよ。」

流石に疲れたかよ子が先に退室する。
それを見た怪人たちが一斉に挨拶する。

「「「かよ子さんーお疲れ様でーっすーーー。」」」

今、この場において、ヴァンプの次に慕われているかよ子だった。
そして・・・、かよ子皆の良心が居なくなつたことで場が動き出す。

「あ、皆さん折角ですし近くの神社まで参拝しませんか？屋台も出てるやしこですよ~。」

戦闘員1号が提案し、大半の面子が賛同。

(アーマルソルジャーとヴァンプはオネムの為、不参加。)

所変わつて、近所の神社。

皆、思い思いに屋台のメニューと甘酒や熱燗等を堪能していた。

「よお、ギョウ。こんな感じでもナンパか？マメだねえ。」

「あ、レッジ。止められないんツスよね。」

「畠わん、ここの前に初田の出の絶景スポットがあるらしいんで、移動しますよ。」

戦闘員の号令で皆ダラダラと移動する。
そこは人気のない広場だった。

「あん？ なんだあ？ こんな所が穴場なのか？」

「・・・クツクツクツクツク。」

薄暗い広場に笑い声が響き渡る。

「・・・？」の声はヴァンプ・・・？」

茂みから、酔いつぶれて宿で寝ているはずのヴァンプが姿を現す。
気がつけば周りの怪人達の姿が見えない。

「温泉は堪能したか？料理は美味かつたか？・・・ククク、それは全て警戒心を失くす罠よ・・・。まんまとハマつておったな？」
「テメー・・・。わざわざそんだけの為にここまで手の込んだことやつたのかよ。」

「いや、田代一人には世話になつていいからな。ほどのせせやかな気持ちという奴よ。」

どんな時でも感謝の気持ちを忘れないヴァンブ（笑）

「ムダ話は二三までよ・・・。れあー出でよーーーフロシャイムの精銳達よーー！」

ザザザツー！

号令に従い、数多の怪人達が現れる。

「これから登る初日の出とは逆に沈むがいいーーサンレッドオツー！」

「『血染めの元旦』と呼ばれる大虐殺が幕を開けた・・・。

「はあ、いい旅行だつたわ。またヴァンプさんにお礼言つとかないよね。」

「機嫌なかよ子。」

レッドとかよ子、二人は既に帰宅していた。

「……言わなくていいよ。」

かよ子とは対照的に不機嫌なレッド。
しかし、二人の正月はのんびりとしたものとなつた。

「ううう……、皆大丈夫……？」

「イテヒ……。」

ヴァンプの周りは痛みに蹲つてゐる怪人達で埋め尽くされていた。
その光景は正に死屍累々。

ヴァンプの正月は皆の看病で終わるのだった……。

EXTRA · 01 (後書き)

今回ばかりはお忙しまして、急遽作り上げてますので誤字脱字等あります
したらお気軽に報告くださいませ。

それでは皆様、あと僅かではありますがよいお年をーー！
そして、新年も元気シクお願いしますーー！

些か遅い気もしますが、皆様明けましておめでとうございます！

お待たせしました！新年一発目の更新となります！

相も変わらず、時間経過の遅い亀小説ですが、今年もよろしくお願
いいたします！

それではどうぞ！

「一日酔いでダウンした面々。

それでもレッドは広域指導員の仕事を。

エヴァはチャチャゼロの妨害にも負けず、登校する。

ヴァンプは学園長に呼び出される。

そして、ついに自分の店を手に入れたヴァンプは着々と準備を進める。

- F i g u r e · 1 1 -

ヴァンプが店を手に入れた同日。

一番最初にエヴァの家を出たレッド。

タカミチと合流して広域指導員の仕事を始める。

「あー、やっぱ飲みすぎたか・・・。」

「ハハハ、僕も久々に楽しいお酒だつたよ。イタタ・・・。」

一日酔いの辛さを隠しつつ、広域指導員の仕事に來てるレッドとタカミチ。

「エヴァ達は大丈夫かな?」

「茶々丸がいるから大丈夫だとは思うんだがなー。」

「まさか、エヴァがあんなに飲むとはね・・・。」

「全くだ。ヴァンプのヤツも弱えんだから、あんなに飲むんじゃね

一つ一つの。」

そんな他愛のない会話の一人の周りには、空手着・柔道着・剣道着等様々な武道系サークルの面々が倒れ伏している。しかし、これをやつたのは彼らではない。

「ハイーッー！」

甲高い掛け声が響く度に人が宙を舞う。

「あの女子、スゲェじゃなーか。」

「ああ、僕のクラスの古菲君だね。このあいだの格闘大会で優勝しちゃつたからね。挑戦者が後を絶たなくてね。」

「ほー。」

最後の挑戦者が倒れた所でタカミチが古菲に話しかける。その間、レッドは生きる屍達を通路脇に片付ける。

「相変わらずだねー、古菲君。」

「アイヤ！高畠先生力！オハヨーネ。」

「おーい、タカミチ。終わつたぜ～。」

「あ、悪いねえ。古菲君、こつちは新しい指導員のレッドさん。」

「おお、見事に赤いアルな～。古菲言つネ、ヨロシクアル！」

「おう、まあヨロシク頼むわ。」

「ムムム、レッドサンも強いアルね？」

「あん？」

「古菲君？」

不穏な空気を感じるレッドとタカミチ。
ニヤリと古菲。

「パオチュアン
炮拳！！」

「お？..」

「ドン！..」

鳩尾目掛けてのストレートを古菲が繰り出す！
レッドは避けない。レッドの鳩尾に古菲の拳が突き刺さる。

ズン！..

回避か迎撃されると思つていた古菲はがっかりする。..が..が..！..

「アレ？ 拍子抜けアル？ ツ！？ そんなんつ！？」

良く見ると、不意討ちにも係わらず拳はヒットしていなかつた。しかも、自分の拳はがつしりと掴まれていた。

抜け出そつにも万力の様に締め付けられてビクともしない！..

「お仕置きだ、 チャイナ娘。」

レッドはそう言い、古菲のおでこにパンチを構える。
只のパンチにかつてない悪寒が走る！..

（マズイ！マズイ！マズイ！）

しかし、逃げられない！..

どれだけ足搔こうが、腕を封じられ、体勢を変えられない以上、対
した抵抗は出来ない。

とうとうレッドのパンチが炸裂。

パン!!

涙目でのたうち回り、おでこを押されたる古菲。

「ううう、ワタシの硬氣孔を抜けてここまで痛いなんて信じられないアル……。」

も失礼だぜ？」

おでこを摩りながら起き上がる古菲。

「レッドサンの言う通りアル。申し訳なかつたアル。」

素直に自分の非を認めて謝罪する。

古賀君。そもそも学校に行かないとい遲刻だよ？補習は嫌だろ

?

・・・・・！補習は嫌アル！！それじゃもう行くネ！！レッドサン
！今度は正々堂々手合わせするアルよ～！！」「

そう言いながら、古菲は走り去つて行つた。

「元気だなあ・・・、チヤイナ娘は。」

「二日酔いの僕達とは大違いだね。」
「違ひねえわ。」

苦笑する一人は、今朝のパトロールを再開した。

「あ、そつそつ。今日は他の広域指導員の人達との顔合わせするから。」

「ん？顔合わせならしたじゃねーか？」

「あれは裏の関係者。今回は一般的の指導員だよ。」

「ああ、そーゆーことか。」

その後、通学路の巡回を続け、レクチャーを受けるレッド。

「しかし、ホント馬鹿デカいよなあ。この学園……。」

「まあね、ここまでの規模は世界でも稀かな？」

「だよなー。アイツとか、スゲエ迷子になりそうだな……。」

レッドは「迷子になつてしまひました～！レッドさ～ん！助けてください～！」と縋つてくるヴァンプを容易に想像出来た。

「ハハハ、有り得るかもね？つと、僕はそろそろ戻るね。顔合わせは三時からだから、それまではパトロール兼散策でもしてるといよい。その指導員の腕章さえしてれば大抵の所には行けるから。」

「おう、まあプログラマしてるわ。」

「それじゃ。」

時計を確認して慌てるタカミチ。彼はクラス担任も兼任しているので、自分のクラスのHRをしなければならない為、急いで戻った。独りになつたレッドはどうするか悩みながら散策を開始する。

「広すぎて何処に行くかも悩むな・・・。」

あてもなく歩いている時、交差点に差し掛かる。

すると園児が泣きながら一人で歩いているのが見えた。

「あん? 何だつて一人でうろついてんだ? 危ねえだろ . . . 」

そうして見ている内に、園児はフラフラと横断歩道を歩き始めた。しかし、歩行者信号は『赤』。そして運悪く一台の車が交差点に差し掛かる。

運転手は携帯を弄つており、園児に気づいた様子がない。

「おいおー・・・。」

このままでは確実に事故が起きる!

あと数mという所でようやく運転手が進路上の園児に気づく。慌ててブレーキを掛けるが到底間に合わない!

キキイイイツツー!!

けたたましいブレーキ音に驚き足が竦んでしまつ園児。

「・・・ちうつ!!」

ドンッ!!

石畳に足跡を残すほど踏み込み!!

それにより得られた爆発的な推進力により接触直前の園児を引っ掴む。

そのままの勢いで反対側の歩道に着地する。アッ。遅れて停止する車。

「危ねえなあ、ギリギリだつたぜ……。」

車はそのまま逃げ去ってしまった。

「『ハハアッ！危ねえだろうが！』『氣をつけてーーーったく。おい、坊主。大丈夫か？怪我ねーか？』
「ヒック、うえつ、うつ……。」（口クリ）

泣きながら頷く園児。

「んで？どうして独りなんだ、坊主。」

頭をやや乱暴に撫でながら事情を聞くレッド。

泣きながらなので、要点を聞き出すのにやや時間がかかったが、要約すると自分で外に遊びに行く途中で先生達と逸れてしまい、心細くなつてフラフラ歩き回つたら余計迷子になつた……との事。

「あー、そりや怖かつたな、坊主。けどな、もう大丈夫だ。俺が幼稚園に連れて帰つてやつからな。」

「え・・・？うんーー！」

それから園児の帽子に書いてあつた幼稚園の名前を近所の案内板で探し出す。

「あー、結構遠いな・・・。坊主、まだ歩けるか？」

「うん、がんばるーー！」

「そりが、坊主は強いな。」

「えへへへへ。」

じぱり歩いてくると園児がレッドの顔を興味深々に見ながら尋ね

てきた。

「ねえーおじけゅうはヒーローなの？」

「ん？ おお、 そうだぜー！ 義の味方ってヤツだ。」

レッドの一瞬にトントンショーンがあがる園児。

「スゴいスゴい… 本物のヒーローだ！」

「そんな走り回ると危ねーぞ？ と言わといつやねえ。」

走り回る園児に注意を促すも遅かつた様で、 転げてしまつ園児。

ステン。

「うう… うう… うええ… う… 」

泣く寸前の園児。

「しゃーねーなあー。」

ひょいと園児を抱き上げ肩車してやるレッド。

「泣くんじゃねえよ。 坊主は強えんだろ？」

「グスグ… うん… う… 」

そのまま肩車で幼稚園に向かうレッド。 目的の幼稚園まであと少しここった所で…

「あー先生だーおーいー。」
「おー、」

「ああー正男君ーよかつたー広域指導員の方、ありがとうございますー！」

レッドの腕章を見た幼稚園の先生。

「通りの交差点で迷子になつてたから連れて來た。」

「本当にありがとうございますー！」

「坊主、もう迷子になんじやねーぞ？」

「うんーありがとーーバーーーのんじやんー！」

園児の正面にしゃがみ込み、頭をワシワシと撫でながら園児に言つ。

「俺の名前はな?天体戦士サンレッドつーんだ。」

「さんれっど・・・。」

「ねつーじやあな。」

「うん、レッドのおじやんー！」

立上り、立去るレッド。その後姿にポンポンと手を振る園児。

振つ返り、背中越しに手を振るレッド。

園児と別れてしまひへると・・・、

ブルルルル・・・

「ん?電話か?」

不慣れな手つきで電話に出るレッド。

「もしもし・・・?」

『あ、もしもし？レッドさん？ワタシワタシ…』

「ワタシワタシって、オレオレ詐欺かつつーの…」

『え？オレオレ詐欺？違いますよおー…ヴァンプですか。』

「んな事あ分かってんだよ…！ブン殴るぞ…！」

『え？分かってる？もー…なら最初から…。』

「んで？用件は何だ…？」

『え？あ、用件？はいはい。学園長さんからですね、お店をお借りすることができましたー！ですので場所をお教えておこうかと。』

「そ、うか、んで？俺等の住処の方はどうなったんだ？店に住めんのか？』

『あ、そうですわ。ワタシ達の住居も兼ねてますんで…ええ。』

「わかった。そんだけなら切るぞ？」

『あ、レッドさんもお昼まだでしたら一度こちらに来ていただけたら、はい。』

「おお、じゃあ一度いいからそっち行くわ。で、場所どこよ？』

『あ、場所はですね…。』

そしてレッドはアシップの店に足を向ける。

「うーか…？」

「ああ、じだわ。」

レッドは改装したての一軒の店の前に来ていた。

間違えようがない。なぜならドアの所に殺人用がぶら下げられていた。

「よう、チャチャゼロ。何やつてんだ・・・？」

「三九、レッド。イラシシャイマセ?」

まさか殺人人形に接客される日が来ようとは思わなかつたレッド。レッドはチャチャゼロを降ろしてやり、共に店に入った。

「うーつす。」

「あ、いらっしゃい。レッドさん。」

片付け作業を中断して出てきたヴァンプ。

「昼飯食いに来たぜ。」

「ケケケ、一名様」案内へ。」

昼食を摂りながら、ヴァンプからの説明を受けるレッド。今日から住める事、店の名前などなど。

「んじゃあ、今日からここに帰つて来ればいいんだな。」

「そうです。」

「じつそさん。んじゃあ行つてくるわ。指導員の集会があんだと。」

「わかりました。あ、これがここのは鍵です。裏から入れますんで。」

「おう、じゃな。」

そう言い、レッドは出て行つた。

その後ろ姿を見ていたヴァンプはビことなく嬉しそうであった。そのまま、鼻歌まじりに作業を再開するヴァンプ。

「ナシダ?」「機嫌ジャネーク?」

「え？ そう？ そんなことないよ～。」

ヴァンプは嬉しかった。広域指導員の仕事に真摯に取り組むレッドが。

所変わつて、広域指導員の寄り合いで顔を出したレッド。
現在、タカミチが他の指導員にレッドを紹介しているところだ。

「……というわけで、こちらのレッドさんがこの度、広域指導員に任命されました。僕と同じで、荒事の担当をメインに考えてますので、荒事の対処への増援等、僕がいないうちは彼にお願いします。」

打ち合わせも終わり、解散となつて直ぐにレッドの元にタカミチが一人の男性を連れてきた。

「レッド、こちらは新田先生。僕が知る中で最も立派な教師です。指導員の仕事で分からぬことがありますたら彼に聞いてください。」
「高畠先生、そんなにおだてないでください。」

タカミチが連れてきた男性の紹介を行う。
ベテランの雰囲気を滲ませる壮年の男性はタカミチからレッドに向き直る。

「どうも、新田と言います。」「どうもっす。」「内田と言います。レッドと呼んでくれたらいいんで。」

未だ自分を内田と書いた若干の抵抗を感じる為、レジエと呼んで貰おうとするレジエ。

THE JAPANESE

「モル、レジアヘ。」

見たまんまでしょ!!」

「ふむ。」

新田はそれ以上の説教はしなかった。

その日は本格的に広域指導員の仕事のレクチャー や 緒注意を受けて解散の運びとなつた。

「あ、レジドー。」「ん?」「せっせ、ある幼稚園から感謝の電話があつたよ。また顔を出して下さこつこ。お手柄じゃないか。」「…よせよ。」

照れるレッド。

「あ、今晚空けておいてくれよ？警備の仕事だから。」

了解

そして今度こそ帰路に着くレジド。

とつとう、警備員としての初仕事。
果たしてレッドは、魔法使い達から信頼を得られるのか？

誤字脱字はお気軽に教え下せこまセー。

この話辺りから、やはり独自解釈が始めます。あまり無茶苦茶にならぬよう元気をつけてこらへつもつです。

それでねえやー。

広域指導員の仕事にやりがいを感じ、仕事をこなすレッド。

今後の拠点となるヴァンプの店を訪れ、昼飯を摂る。

その後、他の指導員の面々との顔合わせを済ませた際にタカミチに告げられる。

「今晚、警備があるから。」と・・・。

（Figure · 12）

草木も眠る丑三つ刻・・・。

静まり返る夜空を満月が照らす。

普段人気のない麻帆良学園都市を囲む森。

鬱蒼と生い茂る木々の間を疾走する幾多の影があつた。

しかし、その影達は一つとして人の形をしていなかつた。

異形・・・、様々な虫や鳥、獣の形をした妖や大小様々な鬼達が麻帆良中央部に向けて侵攻を開始する。

深夜、それは麻帆良がもう一つの顔を見せる時間帯でもあつた。

麻帆良に敵対する者は多い。

図書館島といひ、世界規模の巨大図書館の希少本か、地下の遺跡を

狙つた盗掘者。

『世界樹 神木・蟠桃』の魔力に惹かれて集まつて来る妖魔達。

そして、最も多いのが関西の魔法使い達。

ここ麻帆良学園都市は西洋魔法使い達の組織、関東魔法協会のお膝元であるが故に、協会に反感を持つ日本古来の魔法組織『関西呪術協会』の者達からの襲撃が絶えることはなかつた。

今回の異形たちも関西の呪術士達の召喚による襲撃だつた。

麻帆良に近い山の一角。巧妙に偽装し、認識阻害結界を使用し、隠れている陰陽師の集団がいた。

今回は大規模召喚による、圧倒的物量での同時侵攻。敵の防衛戦力を上回る数で叩き潰す！

その為に、普段の数倍の術士を用意した。

しかし、その大量の術士達も限界寸前までの大規模召喚の後のため、皆息も絶え絶えの様だ。

その集団の中で唯一、余裕のある初老の男性が声をあげる。

「ククク、ここまで数を揃えたのだ！！今回こそ憎き西洋魔法使い達を殲滅するのだ！！」

意氣高揚している初老の男性に召喚した異形達から念話が入る。

『今日はエライ頑張つたの。ここまでの大規模召喚は久し振りやで？』

『旦那も毎回毎回好きやなあ』

『まあ命令やから、ちゃんと仕事はやるけどな？』

『さつきも敵の斥候、追い払つたとこやしな。』

『ほな、ムダ話はそのへんにしといて行こか。』

異形達が念話を切り、更に移動を開始する。

『見えたで！ つり橋や！ あつこから一気に侵攻すんで！』

『『『応つ！ ！』』』

異形達の集団は麻帆良大橋と呼ばれる大きな橋に差し掛かる。

『ん？ 誰ぞ居んで？』

集団の先頭が橋の中腹に到達した頃、異形の一体が敵を発見する。

『なんや・・・？ 赤いのと白いのん、人間が一人あるわ。』

『はつ！ ！たつた二人？ 上等やんけ！ 』のまま突破したるわつ！』

異形の集団が一人を目標に定め、殺氣を漲らせる。

リーダー格の号令を待つ。

『殺せつ！ ！』

号令と共に殺到する異形達。

『おおおおおおつつつ！ ！』

一人に対し、圧倒的なまでの数の暴力。

その暴威は簡単に一人を飲み込むかにみえた。

しかし、その数の暴力が一人に届くことはなかつた。

ボンッ！！

闇夜に10m程の太陽が顕現する。

集団は足を止めてしまう。それが過ちだと知らずに。しかし、それも当然と言えるだろう。夜にいきなり目前に太陽が出現したのだから。しかもその太陽はかなりのスピードでこちらに向かつてきた。

『は？』

『なんじやああああ！？』

『逃げろおおおおつつ！？』

ズ・・・ドオオン・・・。

オオオオオ・・・。

太陽が集団の先頭に着弾、爆発炎上を起こす。

『ぎやあああああああつ！？』

避けることの出来なかつた大半の妖達が消失してしまつた。

数の暴力は、もっと純然たる暴力・・・『火力』に蹂躪されたのだった。

時間は少し遡る。

麻帆良の『夜の警備』とは、学園にいる魔法関係者によつて行われる。

そこにレッドも加わることになつてゐる。

今回もいつも通りとこつとこつとで特別な通達はしなかつた。

「では、今日も頼んだぞい！ぐれぐれも無茶はせんよつてー。」

その言葉により散開する名人。

「爺さん、俺はどーすりやいいんだ？」

皆が散つて行くのを見計らい、レッドは学園長に話しかける。

「おお、レッド殿はその腕を見込んでタカミチ君と激戦区を頼みた
いんじやが、構わんかの？」

「ん、別に構わんぜ？」

「じゃあ行こうか、レッド。」

レッド達が配備されたのは、麻帆良大橋。

大橋は麻帆良と外を陸路で繋ぐ唯一の場所。

故に侵攻の際には敵の主力がここを通過することになる。

激戦区に配置された他の面々が発する緊張した空氣の中、自然体の
レッドとタカミチの二人はリラックスしたものだった。
タバコを取り出したタカミチがレッドに問う。

「吸うかい？」

「お、悪いな。貰つわ。」

一服するレッドとタカミチ。

紫煙を吐き出しつつ、タカミチに問うレッド。

「ふう〜。しつかし・・・、そんなにショッちゅう敵が来んのかよ？」

「うん、ここには貴重な物もいっぱいあるからね。」

「ふ〜ん・・・。」

タカミチから襲撃の背景の説明を軽く聞いていると、周囲が慌しくなってきた。

前方から見回りしていた魔法先生達が帰つて来た様だ。

彼らは皆、多少の負傷をしている。

その内の一人がタカミチの前まで来て、息を荒げたまま報告を行う。

「高畠先生！！ハアハアツ・・・！敵がつ！！大勢の敵が迫つて来るつ！！！」

ザワツ！

周囲が一気に緊張を高める。

「落ち着いて！..各員迎撃体勢を整えて！..非戦闘要員は負傷者を連れて下がつて！レッドー前に出るよー！」

タカミチがタバコを携帯灰皿に捨てながら冷静に指示を出す。

「「「ハ、ハイツ！」」

「あいよ〜。」

浮き足だつてしまつた周りが落ち着く時間を稼ぐため、このエリアの最高戦力を前線に出す。

丁度その頃、橋の反対側に異形の大軍が姿を見せた。

「えらい団体のお客さんだな？」

「うん、ここまでのはそつそつあるもんじゃないよ・・・。」

「初勤務だつてえのによお・・・。」

「でも、レッドがいてくれる田代良かつた。これは結構厳しい事になりそうだ・・・！」

「おい・・・、結構派手にやつてもいいんだつたな？」

「ん？いいけど、あまり橋は壊さないでくれよ？」

「りょくかい。派手な狼煙を上げてやる・・・よつとおーーー！」

そう言い放ち、身体を腰溜めに両手を上に挙げ構える。

「ゴロナ・アタック！..！」

ボンッ！！

両の手の間に10m程の巨大な火の玉が生み出される。

それは最早、小型の太陽だつた。

それをレッドは無造作に投げつける。

「オラアツーー！」

ズ・・・ドオオン・・・。

「凄いね、レッド・・・。今の火の玉、『燃える天空』位あつたんじゃないかい？」

「伊達に太陽の戦士を名乗つてねーよ。それより今之内に他所と連

絡しどけ。何かキナ臭え・・・。

「わかつた。すこしこの場は頼んだよ。」

「おつよ。」

連絡の為、タカミチが少し下がる。

代わりにレッドは前に出る。

「おーおー、化け物のオンパレードかよ。」

目前に広がる異形の群れに対し、皮肉な笑みを浮かべるレッド。電話を終えたタカミチがレッドに叫ぶ。

「レッド！君の言つ通りだ！他も敵が大群で攻め寄せて来てるみたいだ！…ここに戦力を集中してるとから、他が戦力不足になつてゐたいだ！」

「…ちつ！タカミチ！…はい！最低限残して、連れてつて救援に回れ！」

「しかし！」

レッドの提案に渋るタカミチ。

「いいから行け！先刻から俺の耳に悲鳴が聞こえつ放しなんだよ！」

「…つー？わかつた！無理はしないでくれよ…！」

しばらくして大多数の魔法使い達がタカミチの指示に従い、離脱していく。

逆にレッドは一度残つた味方の元に戻つた。

10人程度しか残つていない味方。

レッドは動搖の残る味方達に語る。

「聞いた通りだ！他もヤベエ状況だ！新参者の俺の言つ」と聞くのは抵抗あるだろうが、ここは従つてくれ！」

橋の方に視線を戻すと、異形の集団にも体制を整えつつあった。レッドは近くの魔法使いに問いかける。

「ちい・・・。なあ、魔法使いつてのは色々撃つたり、結界つてのを張つたり出来んだろ？」

「・・・あ、ああ。」

「その結界つてので橋以外から敵が進めない様にしてくれ。出来るか？」

「それ位ならこの人数でも出来るだろ。・・・任せてくれ。」

「頼んだ結界つてのは何人で張れる？」

「侵入を拒むだけの結界なら5～6人位だ。」

「じゃあ結界つてのを張るのに7人、得意な奴を選んでくれ。後の3人は空を飛ぶ奴を迎撃してくれ。倒す必要はねえ。後は俺がやる。」

「だ、大丈夫なのか？」

「心配すんな。そつちも頼んだぜ。」

そう言い、背を向けて橋に向かう。

残された魔法使い達は黙つて進んでいくレッドの背中に頼もしさを感じた・・・。

「よしーーひらも準備にかかる！」

橋の中腹、異形の集団の手前まで進むレッド。

背後で結界が起動するのを感じつつ、足を止める。

「待たせたな、オマー等。悪いがこつから先は通行止めだ。」

『ナンや？ 兄ちゃん、一人かい？』

「おお。お前え等位、俺一人で充分だろ？」

『ああ？ 上等やないかい、ワレエ・・・。』

「いいが、オメー等。死にてえ奴だけ・・・。かかつて来おいつ！』

レッドのあげる気炎に怯む異形達。

『何ビーピーヒンねん！ 相手は一人やぞ！-！』

『『『『オオオオオツツツ』』』』』

リーダー格の鬼が仲間に発破を掛ける。その発破と共に一斉に仕掛ける異形達。

様々な種類の異形が、己の誇る牙で爪で武器でレッドを殺そうと殺到する！-！

様々な攻撃が空気を切り裂きながらレッドに迫る！-！

それに対し、レッドはたつた一握りの拳で相対する。

レッドに覆い被さる異形達。

「オラオラオラオラアアアアツツツ！-！-！」

「ゴンツゴガガゴガゴガンツツ！-！-！」

それを真正面から殴り飛ばす！

『『『ガアアアアツ！-？』』』

次々と還されていく異形達。

『アホな！？何の魔力もないブン殴りでワイ等を還すやつおつ！？』

驚愕するリーダー格の異形。

「どうした？」「ひつけ忙しいんだ。どんどん来いやあー。」「ハアッ！」

レッドと異形達の死闘が今！幕を開ける！

一方、戦線を離脱したタカミチは人員を各地に援軍として送りつつ、自身も瞬動を繰り返し激戦区を援護に向かう。

ザシユツ！

瞬動を終え、このHリアの指揮官である黒人男性に話かける。

「ガンドルフィーニ先生！戦況はつ！？」

「高畠先生つ！？大橋を担当された筈ではつ！？」

「そこはレッドが一人で抑えています！それよりこここの戦況を！」

「彼が一人で！？・・・あ、いや、そうだな。こちらも普段では考えられない位の質と量の敵が襲ってきたんだ。学生達を後方支援に回し、我々が前線で踏ん張つていたんだが、徐々に学生達がダウンしてしまい、防衛と牽制で手一杯になつていてる。」「敵の増援は？」

「今のところ確認されていないが・・・。」「

「わかりました！すぐに迎撃に入ります！…」つちも急いでるんで
ね！左手に魔力！右手に気！合成！！」

カツ！キキキキキキ・・・ツ！

そう言い放ち、タカミチは咸掛法を発動させる。
そのままポケットに両手を入れ、腰溜めに構える。

「豪殺！居合い拳つ！…」

ドゴンツ！

異形の集団の真ん中に穴が開く。
それだけでは終わらない。

「ふつ！」

パパパパパパパン・・・・！

ドゴンツ！

居合い拳で散り散りになつた異形達を牽制しつつ、一箇所に集めて
いく。

異形達が密集した所に再度、豪殺居合い拳を叩き込む！

その様は正に絨毯爆撃！打ち出された拳圧が無慈悲に異形を還して
いく。

煙が晴れると、大きなクレーターが残るのみ。

「流石は高畠先生だ！AAAの『悠久の風』だ！」

「なんて強さだ・・・。」

「これが『アルフラ
赤き翼』の英雄だ！！」

タカミチの強さに湧き上がる周囲。

そんな周囲に忠告する。

「油断しないで！周囲を索敵と警戒を！」

周囲の索敵を終え、敵影がないことを確認したタカミチはガンドル
フィーに話かける。

「先生！僕は次の救援に行かないといけないので、事後処理をお任
せます！」

「ああ・・・！後は我々で！力になれなくてすまない！」

「いえ！それでは！」

ザシユツッ！！

瞬動でその場を離れるタカミチ。

（クソツ！）ここまで大規模な襲撃だったなんて！レッドは大丈夫な
のかつ！？）

未だ少數で橋を押さえているであろうレッドを窺じる。

しかし、救援を求めているエリアが数多くあり、レッドの元に向か
うことは許されない。

そんな不安と焦りに駆られながら、タカミチは次のエリアへの救援
に向かう為、更に脚に力を籠める！

（僕が戻るまで、無事でいてくれよー・レッドー！）

麻帆良学園の英雄は闇夜をひたすらに疾走する。

異形の闇が麻帆良と太陽を覆う。

誤字脱字、『』意見突つ込み等、お気軽に感想まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0215y/>

ネギま！太陽の戦士

2012年1月14日19時54分発行